

下郡遺跡 —第一～七次調査—

2013.3

三重県埋蔵文化財センター

卷頭写真 1



卷頭写真2



不明鉄製品 (395)



SE303断面状況

例 言

1 当報告書は、三重県伊賀市(旧・上野市)下郡字下代・北馬場に所在する下郡(しもごおり)遺跡(遺跡略記号=4JSG)について、三重県教育委員会が実施した第一次から第七次の発掘調査結果をまとめたものである。

2 当遺跡の調査は、下記のとおりである。なお、当報告書作成には下記の報告類(本文18頁〔註〕②)と、その他の文献(本文18頁〔註〕③と④)も援用した。

調査年度	現場調査期間	調査面積	現場担当者	報告書類	その他
第一次調査	53(1978) 10月16日～11月24日	400㎡	山田 猛・田村輝之	1979「概報」	試掘調査
第二次調査	54(1979) 1月10日～1月26日	480㎡	中森英夫・山田 猛	1980「概報」	試掘調査
第三次調査	55(1980) 10月20日～12月20日	1,200㎡	中森英夫・山田 猛	1982「三・四次概報」	
第四次調査	56(1981) 10月19日～2月27日	1,200㎡	山田 猛・西森平之	1982「三・四次概報」	
第五次調査	57(1982) 11月1日～2月17日	1,000㎡	中森英夫	1984「57・58年度概報」	
第六次調査	58(1983) 10月3日～1月26日	1,550㎡	中森英夫・吉水康夫	1984「57・58年度概報」	
第七次調査	60(1985) 8月19日～10月17日	1,550㎡	中川善夫・倉田 守	1986「報告」	

3 当報告書は、各報告を基に山田猛が編集・執筆し、大部分の遺物撮影は田中久生が担当した。

4 調査に先立って遺跡地内に任意の座標を設定し、各調査区の位置を示した。但し、第七次調査はこの限りではない。

5 当報告書では、全て真北を用いた。なお、当該地域の磁針方位は西偏6度20分(昭和43年)である。

6 各遺構は、下記の略記号と3桁の数字を付して表示した。この3桁の数字は、百の位が調査年次を、十と一の位が各調査年次内での通し番号を示している。

掘立柱建物 = SB 井戸 = SE 土坑 = SK 溝 = SD その他 = SX

7 各遺物には3桁の数字を付した。この3桁の数字は、百の位が調査年次を、十と一の位が各調査年次内での通し番号を示している。但し、試掘調査である第一・二次では、両調査を併せて百の位を「1」とし、十と一の位は両調査を併せて通し番号を付した。また、調査区が重複する第五・六次でも両調査を併せて百の位を「5」とし、十と一の位は両調査を併せて通し番号を付した。なお、参考資料に関しては通し番号のみとした。

8 本文中に挿入した図表は「挿図表○」、本文の後にまとめた図表は「第○図」や「第○表」、写真は一枚毎ではなく版番号で「巻頭写真○」や「写真○」、と表記した。

9 発掘調査は、一級河川木津川改修工事事業に先立って三重県土木部(当時)からの執行委任を三重県教育委員会が受けて実施したものである。

10 調査に際しては、地元各位をはじめとして下郡区長や下郡市民館・上野市教育委員会・上野市、森川櫻男氏のほか、県土木部木津川改修工事事務所等、当時の多くの方々のご協力をいただいた。

11 当遺跡の出土遺物と関係資料類は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに	1
(1) 調査の経緯	1
木津川改修計画/市教委・調査会の調査/県教委の調査	
(2) 遺跡の環境と概要	1
立地/歴史的環境/遺跡の概要	
第II章 遺構と遺物	5
第1節 第一・二次(昭和53・54年度試掘)調査	5
第一次調査(試掘)/第二次調査(試掘)	
第2節 第三次(昭和55年度)調査	5
(1) 北区	5
SE303/SX306/SX307/SK322/SK325/その他の遺構	
(2) 南区	6
SB301/SE304/SD318/SD319/SD320/木葉型鋸/錠前/大型角釘/ 不明鉄製品/その他の遺構と遺物	
第3節 第四次(昭和56年度)調査	8
(1) A区	8
SE405/SX409	
(2) B区	8
SX410/SK437/SK438	
(3) C区	9
(4) D区	9
SD420/革芯漆塗小札/SK451	
(5) E区	9
第4節 第五・六次(昭和57・58年度)調査	9
SE501/SE502/SX523/SE603/SE604/SD620/SD630/SD631/その他の遺構	
第5節 第七次(昭和60年度)調査	10
(1) A区	10
(2) B-1区	10
SD701/SD702	
(3) B-2区	11
SD702/SD703/SD704/SE705	
(4) B-3区	11
SD701/SE706/SK707	
第III章 考察	12
第1節 遺物について	12
信楽焼播鉢の編年問題/近世焼物の状況/軟陶播鉢/木葉型鋸	
第2節 遺構について	14
石組井戸/北馬場館跡/伊賀の中世城館	
第3節 下郡遺跡の歴史的世界	17
伊賀郡条里の坪並/下郡の猪田神社/猪田の猪田神社	
[註]	18
[参考文献]	19

卷頭写真目次

巻頭写真1	木葉型鋸(392)、鏡前(393)、草芯漆塗小札片(430・431)
巻頭写真2	不明鉄製品(395)、SE303断面状況

挿図表目次

挿図表A	下郡遺跡の調査実績	1
挿図表B	参考遺物一覧表	3
挿図表C	参考遺物実測図	4
挿図表D	信楽焼播鉢の2組列	12
挿図表E	信楽焼練鉢・播鉢の型式編年図	13
挿図表F	軟陶播鉢の例	14
挿図表G	木葉型鋸の変化	14
挿図表H	石組井戸一覧表	15
挿図表I	石組井戸の変化模式図	15
挿図表J	北馬場館跡推定図	16

表目次

第1表	第一次調査(試掘)結果一覧表	20
第2表	第二次調査(試掘)結果一覧表	20
第3表	遺構名対照表	21
第4表	第一・二次調査(試掘)出土遺物一覧表	22
第5表	第三次調査出土遺物一覧表	22
第6表	第四次調査出土遺物一覧表	23
第7表	第五・六次調査出土遺物一覧表	23
第8表	第七次調査出土遺物一覧表	23

図版目次

第1図	位置図	24	第6図	第三次調査北区SX306実測図	27
第2図	地形図	25	第7図	第三次調査北区SK322実測図	27
第3図	発掘調査区割図	26	第8図	第三次調査北区SK325実測図	27
第4図	第三次調査北区・第四次C区平面図	26	第9図	第三次調査南区平面図	28
第5図	第三次調査北区SE303実測図	27	第10図	第三次調査南区SE304実測図	28

第11図	第三次調査南区SB301平面図	28	第30図	第六次調査SX635実測図	32
第12図	第三次調査南区SD319土層図	28	第31図	第七次調査A区平面図	33
第13図	第三次調査南区SD318土層図	28	第32図	第七次調査B-2区平面図	33
第14図	第三次調査南区SD320実測図	28	第33図	第七次調査B-2区SE705実測図	33
第15図	第四次調査A区平面図	29	第34図	第七次調査B-3区平面図	33
第16図	第四次調査A区SX409実測図	29	第35図	第七次調査B-3区SE706実測図	33
第17図	第四次調査A区SE405実測図	29	第36図	第七次調査B-1区平面図	34
第18図	第四次調査B区平面図	30	第37図	第七次調査B-1区SD701土層図	34
第19図	第四次調査B区SK437実測図	30	第38図	第一・二次調査区出土遺物実測図	35
第20図	第四次調査B区SX410実測図	30	第39図	第三次調査北区出土遺物実測図	36
第21図	第四次調査D区北壁土層図	31	第40図	第三次調査南区出土遺物実測図(1)	36
第22図	第四次調査D区平面図	31	第41図	第三次調査南区出土遺物実測図(2)	37
第23図	第四次調査E区平面図	31	第42図	第四次調査区出土遺物実測図	38
第24図	第五次調査区平面図	31	第43図	第五・六次調査区出土遺物実測図	39
第25図	第六次調査区平面図	31	第44図	第七次調査A・B-1区出土遺物実測図	40
第26図	第五次調査SE501実測図	32	第45図	第七次調査B-2区出土遺物実測図	41
第27図	第五次調査SE502実測図	32	第46図	第七次調査B-3区出土遺物実測図(1)	42
第28図	第六次調査SE603実測図	32	第47図	第七次調査B-3区出土遺物実測図(2)	43
第29図	第六次調査SE604実測図	32	第48図	第七次調査B-1・2区出土石造遺物実測図	43
第49図	第三次調査南区SD320出土鉄製品、第四次調査SD420出土小札実測図	44			

写真図版目次

写真図版1	下郡地区空中写真/旧観音堂板碑(10)/巡拝供養碑・大師橋供養碑/第三次調査北区	45
写真図版2	SD316・315等/SX306・307/第三次調査北区南東部/SX307/SX306/SX306	46
写真図版3	SX306/SX306/SX306/SK322/SD316等/SD311~313	47
写真図版4	SE303/SK323/SE303/SK325/SE303/第三次調査南区北部/SE303/第三次調査南区	48
写真図版5	SD318/SD320/SD320-SX308/SD320/木築型鋤(392)出土状況、 錠前(393)・不明鉄製品(395 a ~ p)出土状況/大型角釘(394)出土状況/SE304	49
写真図版6	SE405/SE405/SE405/SX409/SE405/第四次調査B区/SE405/SX410	50
写真図版7	SX410/SX410/SK437/SK438/SK438/SK438/第四次調査D区/第四次調査D区	51
写真図版8	SD420/SD420出土鉄鏝/SD420出土木製品/第六次調査区/第五次調査区北部/ SX507等/SX514、SD511・515等/SD516、SE501、SX513・512	52
写真図版9	SX512/SX507/SX528/SX519/SE501/SE502/SE603/SE604	53
写真図版10	SX635/SD620/SD630/SD630/第七次調査B-1区/第七次調査B-1区/SE706/SE706	54
写真図版11	錠前(393) X線写真	55
写真図版12	不明鉄製品(395 a ~ p)、土器(501・343内外面)	56
写真図版13	土器(101・137・139・142・325・335・336・341・344・355~357)	57
写真図版14	土器(366・381~383・388・391・401・408・416・422・701・751)	58

第Ⅰ章 はじめに

(1) 調査の経緯

木津川改修計画(第1・2図、写真1) 伊賀市(旧・土木津市)の下郡一帯は、以前から古墳時代の土器等が出土しており、「下郡遺跡」として知られていた。

この下郡地区の東を北流する木津川(長田川)は、沖の集落の東を蛇行していたものを江戸時代の初期に改修し、現状のように直流させている。このために河床が高く、洪水時には上流で溢れることがあった。

そこで、木津川の川幅を西側に拡幅する計画と支流の矢田川の改修計画が、三重県土木部(当時)によって計画された。これにより、木津川拡幅計画地内にあった下郡集落の家屋は、西側に集団移転することとなった。また、この事業と併せて上野市による下郡地区の団体営圃場整備事業も計画され、地域の総合開発が図られようとした。

市教委・調査会の調査(挿図表A、第2図) 昭和52(1977)年11月、上記事業の具体的な計画が示されるに及んで、三重県教育委員会と上野市教育委員会による埋蔵文化財の分布調査が実施された。その結果、遺物の散布がほぼ全域に及んでいることが確認された。

そこで、県土木部と県教委・市教委とで協議し、試掘調査を実施することとなった。そして、同年12月に上野市教委が本川拡幅部以外(集団移転地と圃場整備地域・矢田川改修地域)の16haを対象に試掘調査を実施した。この結果、本調査が必要となった。

この試掘結果を受け、昭和53(1978)年2～4月には県教委の応援を受けた上野市教委と下郡遺跡調査会によって本調査が実施された^①。

県教委の調査(挿図表A、第2・3図) 市教委・調査会

の調査とは別に、木津川の拡幅部分に関しては県教委によって調査された。すなわち、第一次調査として、昭和53(1978)年10月から11月にかけて50箇所に試掘坑が設定された。ついで、昭和55(1980)年1月に第二次調査として30箇所に試掘坑が設けられた。さらに、この試掘調査結果を受けた本調査が、昭和55年度から60年度に及んで第三～七次として実施された。

この7次に及ぶ県教委の調査結果は、それぞれ何らかの形で報告されている^②。しかし、概報である等のために不十分な面も残されており、また調査の全体を知るには不便であった。そこで、県教委による第一から第七次の調査結果を改めてまとめたものが、当報告である。

なお、各次の報告書類のほか、出土した木葉型鋸については大工道具の専門家からの報告もなされている^③。また、信楽焼の播鉢等については、概報の不備を補うための資料紹介が県教委の許可を得てなされている^④。当報告は、これらも含めて再度まとめたものである。

(2) 遺跡の環境と概要

立地(第1・2図) 三重県伊賀市下郡に所在する下郡遺跡は、上野盆地の中央を北流する木津川(長田川)西岸の、標高150m前後を測る水田地帯に立地している。但し、江戸時代初期までの木津川は、現在東岸にある沖集落のさらに東方を蛇行していた。当遺跡と今回の改修前の木津川とに挟まれて比高2m程の南北に細長い低地が続くが、これは沖集落周辺と同じ旧氾濫原である。当遺跡は、この旧氾濫原に臨む河岸段丘上に立地している。

歴史的環境(挿図表B・C、第1・2図) 下郡遺跡(1)の所在する旧伊賀郡周辺には、多くの道路が存在する^⑤。

主体	調査	年度	現場調査期間	調査面積	現場担当者	報告書類	備考
市調 査委 会	試掘	S52(1977)	12月17日～12月24日	264㎡	中森英夫・山本雅靖	市78「報告」	木津川本川以外
	本調査	S52(1977)	2月23日～4月20日	1,400㎡	中森英夫・山本雅靖・山田 猛	市78「報告」	法華寺・矢田川地区
県 教 委	第一次	S53(1978)	10月16日～11月24日	400㎡	山田 猛・田村輝之	県79「概報」 県80「概報」	試掘調査(本川部分)
	第二次	S54(1979)	1月10日～1月26日	480㎡	中森英夫・山田 猛		
	第三次	S55(1980)	10月20日～12月20日	1,200㎡	中森英夫・山田 猛	当 報 告 書	本調査(本川部分)
	第四次	S56(1981)	10月19日～2月27日	1,200㎡	山田 猛・西森平之		
	第五次	S57(1982)	11月1日～2月17日	1,000㎡	中森英夫		
	第六次	S58(1983)	10月3日～1月26日	1,550㎡	中森英夫・吉水康夫		
	第七次	S60(1985)	8月19日～10月17日	1,550㎡	中川善夫・倉田 守		
					県84「57・58年度概報」 県86「報告」		

挿図表A 下郡遺跡の調査実績

来したという話が伝えられており、住吉神勧請に因む縁起譚と考えられる。

中世に関しては、市教委と遺跡調査会による法専寺移転予定地の調査区である字「下代」から「下代館跡」が検出された。これは、その存在がこれまでまったく知られていない城館跡であった。また、当書で報告する調査によって、従来の「加納氏堡」推定地よりも南東100m程の字「北馬場」地内に残っていた古地名「カナヤシキ」でも居館跡が発掘された。これは、「北馬場館跡」として以下に報告するものであり、「加納氏堡」の可能性が高いと考えられる。やはりこの城館跡も、この地点に所在することはまったく予想されていなかった。

なお、調査区の南北中央付近には、「観音堂」と呼ばれていた小堂があった。この信仰対象は観音像ではなくて板碑であり、月輪に囲まれた主尊種子はキリーク（阿弥陀如来）である。付近に放置されていたものを、何十年前に観音堂としてこの地に祀ったとの話である。現在は、同じ下郡の崇恩寺境内に移されている。また、同市白樫の慈尊寺の板碑は、右のように同題旨の銘が刻まれている。それは、妙阿尼の三回忌にその子らが追善供養のために元亨元（1321）年に建立したものである⁹。

また、下郡の南東に架かる依那古橋の西詰め近くには、右記のように寛政元（1789）年銘の「大師橋供養碑」や明和6（1769）年銘の「巡拝供養碑」も祀られていた。

〔観音堂（崇恩寺）板碑〕

右、相当悲母尼妙阿第三忌辰[□]

一字妙典一部十組心[□]

一字一基[□]

□十二月八日教子⁹

〔慈尊寺板碑〕

右相当悲母尼妙阿第三忌辰、

書写一石面一乘妙典一部十組心^經

一字一基八万四千卷 石塔造立意趣

専祈得脱及至法界平等利益矣

元亨元¹³²¹十二月八日教子等⁹

〔大師橋供養碑〕

奉供養大師橋

寛政西閏六月日

〔巡拝供養碑〕

信州善光寺

供 駿州富士山

四國八十八所

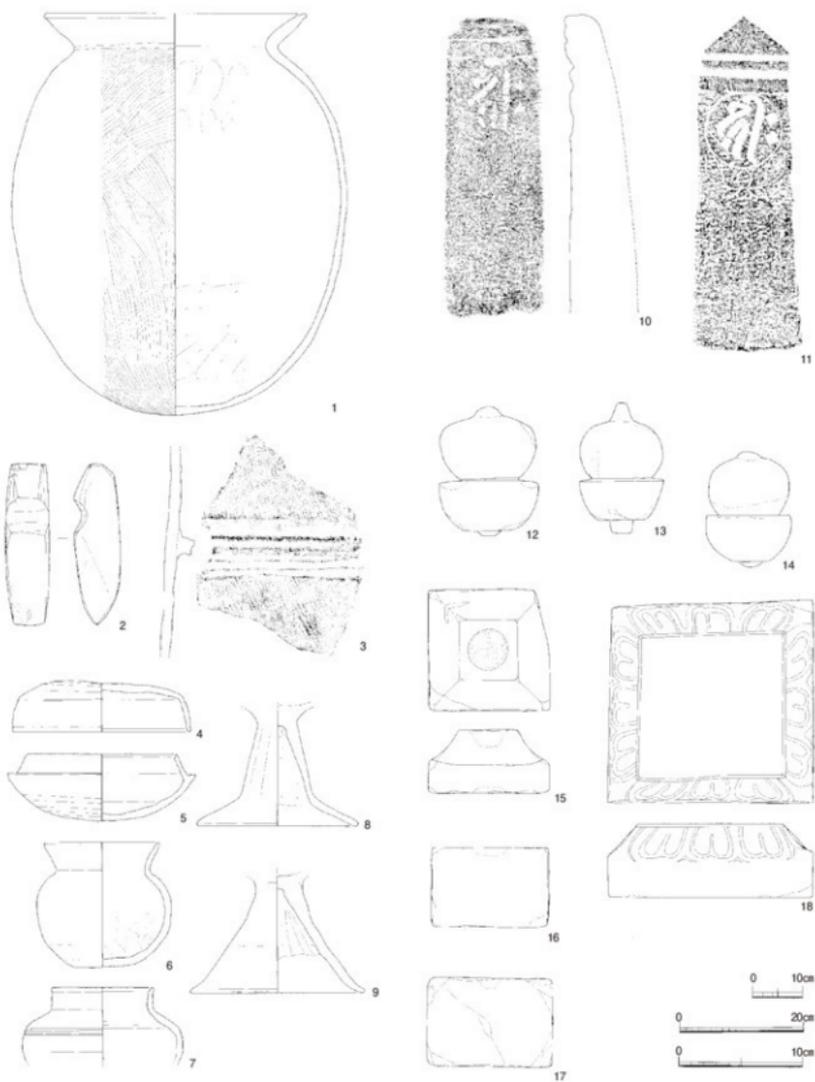
養 秩父三十四所

坂東三十三所

吉明和六歳己丑十二月朔日

遺物番号			出土地等	備考
当報告	既報告	整理		
1	概報1の3		伊賀市下郡	個人蔵、土師器、甕
2		001-05	伊賀市比叺	個人蔵、挟入片刃石斧
3		001-02	伊賀市才良か比叺	個人蔵、円筒埴輪
4		001-04	伊賀市才良	個人蔵、須恵器、坏蓋
5		001-03	伊賀市才良の山中	個人蔵、須恵器、坏身
6		001-07	伊賀市下郡	個人蔵、土師器、小型甕
7		001-06	伊賀市下郡	個人蔵、須恵器、小型甕
8		001-01	伊賀市下郡	個人蔵、土師器、高坏
9		002-01	伊賀市下郡（猪田神社前）	個人蔵、土師器、高坏、矢田川改修時出土
10			下郡の観音堂（現・崇恩寺境内）	観音堂板碑
11			伊賀市白樫・慈尊寺境内	板碑、『伊賀市史第1巻通史編』（伊賀市、2011年）から転載
12	第七次97		観音堂跡地	積組式五輪塔の空風輪
13	第七次96		観音堂跡地	積組式五輪塔の空風輪
14	第七次98		観音堂跡地	積組式五輪塔の空風輪
15	第七次100		観音堂跡地	積組式五輪塔の火輪
16	第七次101		観音堂跡地	積組式五輪塔の地輪
17	第七次102		観音堂跡地	積組式五輪塔の地輪
18	第七次103		観音堂跡地	台座

挿図表B 参考遺物一覧表



挿図表C 参考遺物実測図 (10-12~18は1/8, 11は1/10, 他は1/4) 11は註⑧bの文献から転載

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 第一・二次(昭和53・54年度試掘)調査

第一次調査と第二次調査は、木津川改修工事予定地内における試掘調査である。調査対象地域は東西約100m、南北約900mと広いため、便宜的に調査区のほぼ中央で河岸段丘上にある「観音堂区」、河岸段丘から旧氾濫原へと漸次低くなる「山ノ神区」、さらに旧氾濫原を「東区」と「北区」「南区」と区分した。

この2年度に及ぶ試掘の結果から、観音堂区と山ノ神区の本調査が必要と判断された。

この調査結果は既に報告済みであり⁹⁾、さらに第三次から第七次の本調査報告があるため、当報告では個別の記述は省略する。

第一次調査(試掘)(第1・4表、第2・38図、写真13)

原則4m×2mとした試掘坑を計50ヶ所に設定した。

調査の結果、北区では顕著な遺構は確認されなかった。しかし、当遺跡発見の契機ともなった合口甕棺はこの付近から出土している。

観音堂区では、中世の池状遺構(SX7)等や弥生時代以降の遺物が検出された。

山ノ神区は、後述する「北馬場館跡」の検出された地点であり、「カナヤシキ」の付近である。中世以降の土器類や瓦、籬羽口、鉄滓が出土した。

南区では瓦器等が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。

東区は、中央部分が旧木津川の蛇行攻撃面で遺構・遺物が認められなかった。

第二次調査(試掘)(第2・4表、第2・38図) 原則4m×4mの試掘坑を30ヶ所に設定し、試掘坑の番号は前年度のものに続けた。

調査の結果、北区では石蔵及び古墳時代の土師器や須恵器、瓦器等が出土した。

観音堂区では、近世の土坑や陶器類が検出された。

山ノ神区では、少量の土器が出土したのみであった。

南区では、古式土師器や瓦器等が出土した。

東区は水田になっているが、北部では中世の遺物を微量に含む2番床まで認められ、南部では近世の遺物が出土した1番床のみであった。

第2節 第三次(昭和55年度)調査

第三次の調査区は、東西の里道によって観音堂の西側(北区)と南西側(南区)に分かれている(第3図)。両区共に水田だったが、北区は南区よりも1m程低い。

(1) 北区(第3・5表、第4図、写真1・13)

SE303(第5図、巻頭写真2、写真4) 調査区南壁に接する、円形の石組井戸である。

掘り方は底径12m弱であり、蹴層まで掘り下げている。掘り方の底には径8cmの丸太を内法約0.9m(3尺)の井桁に組んで框とし、この上に人頭大の川原石を組み上げて井筒としている。石組みの平面形は、框に合わせた方形から次第に円形に変えている。また、断面形は下膨れになっており、框から3尺程上までが内径3尺程と大きく、上部では径約2尺5寸にまで狭められている。底部の標高は147.75mを測る。

遺物に恵まれなかったために所属時期は不明であるが、近世後期に属するものであろうか。

SX306(第6図、写真2・3) 調査区東壁に接する池

状の石組遺構であり、南北約46m、東西約25mの不整形長方形を呈する。人頭大の川原石を内側に面を揃えて積んでおり、最も残りの良い部分では5段、0.56mを測る。南側では、壁面を構成する石組みに接してやや小さい石を立て並べ、さらに石敷きの小溝が付属していた可能性がある。さらに、西側も同様であったかと思われる。

出土遺物がないために所属時期は不明だが、南に並ぶ同様なSX307からは信楽焼の塊が出土しており、少なくともその廃絶は近世後期かと考えられる。

SX307(第4・39図、写真2) 調査区南東にあり、SX306の南に並ぶ池状の石組遺構である。人頭大の川原石が部分的に1段残るのみであった。川原石間の内法で南北は約36mを残すが、東西は残存する掘り方から3m程と推定される。

近世の信楽焼塊(316)が出土している。

SK322(第7・39図、写真3) 調査区北東部の土坑であり、内部には人頭大の川原石をコの字形に残してい

た。石組の内法幅は約0.45m(1尺5寸)である。

瀬戸・美濃系の天目茶碗片等(313・314・317)が出土している。墓坑かとも思われるが、不明確である。

SK325(第8図) 調査区中央部の土坑であり、長さ1.85m、短径1.3mを測る。人頭大の川原石があり、内法0.8m程の方形に組まれていた可能性が高い。

墓坑かとも思われるが、遺物も出土しておらず積極的な把握はない。

その他の遺構(第4・39図、写真2・3) 北調査区にはSD311～317のように人頭大の川原石が混入した溝が縦横に認められ、中世から近世の遺物が出土している。

(2) 南区(第3・5表、第9・40・41図、写真4)

SB301(第11図) 調査区の中央部で検出された掘立柱建物である。概ね段階でSB1とSA2としたものを改め、桁行3間・梁行1間の東西棟とした。

桁行の柱間は20m等間、梁間は30mである。したがって全体規模は桁行20尺・梁行10尺となり、1尺の実長は30.3cmよりも300cmであった可能性が高い。

遺物が伴わず、所属期は不明である。

SE304(第10図、写真5) 調査区東壁の中央付近に近接する、円形の石組井戸である。

掘り方は、残存上部で径28～32mの不整形円形を呈する。24m程まで掘り下げたが、危険なために掘削や実測を途中で断念した。人頭大の川原石を平面円形に組み上げて井筒としており、断面形は直線的に上部径径が大きくなっている。掘削できた最深部は底部に近いと思われるが底部に達しておらず、標高147.7mを測る。

遺物が出土しなかったために不確実だが、中世前期の所産であろうか。

SD318(第9・13・41図、写真5・13・14) 調査区西部の浅い南北溝である。幅約5m、深さ0.6m程を残す。

重複した遺構が破壊されていたらしく、奈良時代の土器(352)が混入していた。また、近世のSK328とも重複していた。

中世を中心とした土器(344・347～354・358～362・364～368・373・374)が出土した。このほかに煙しを施した布目瓦(372)も出土しているが、これは伝「正藏寺」との関係も考えられようか。

SD319(第9・12・41図、写真14) 調査区北部の細い東西溝である。やや湾曲しており、SD318に切られている。幅約1.05m、深さ0.65m程を残す。

遺物の中世の土師器皿(346)と近世の壺(386・388)があるが、近世のものは混入と思われる。

SD320(第14・41図、写真5) 調査区南部の東西溝である。葉研堀であり、幅約6m、深さ16m程を残し、底部の標高は148.85m程である。その位置関係や絶対高、出土遺物等から、後述する「北馬場館跡」の堀の北面中央部と推定される。

埋土は、下層の還元層と上層の酸化層に大別でき、さらに下層の還元層は2細分できる。下層の下部は、遺物や木片が混入する黒色系の粘質土であり、居館の存続期の堆積と考えられる。下層の上部も、木片の混入する暗灰色系で粘質土の還元層であり、廃絶時の堆積かと思われる。なお、下層である還元層の上面は標高149.9～150.1m程と約0.2m上下している。

一方、上層は酸化しており、廃絶後の埋没と考えられる。一時に埋め戻した様子はない。

底部からは、次に記すように木葉型鋸(392)や錠前(393)・大型角釘(394)・不明鉄製品(395)が自然木等と共に出土した。当遺構からは、15世紀から16世紀に及ぶ信楽焼播鉢(345・369～371)が出土している。

なお、第四次D調査区の一連の遺構では、下層から14世紀後半から15世紀中葉の、上層から15世紀後半の遺物が出土している。これらの事実から、木葉型鋸や錠前・大型角釘・不明鉄製品等は、14世紀後半から15世紀中葉にかけての所産である可能性が認められるが、15世紀前半の可能性が最も高く、15世紀中葉に廃棄されたものと推定される。

木葉型鋸(第49図392、巻頭写真1、写真5) 上述のように、「北馬場館跡」の北面堀であるSD320の底部から出土した。概ね簡単に報告しているが、このほかに大工道具の専門家による検討も加えられており、当書ではこの検討結果に大きく依拠して報告しておく。

鋸身の先が鋭尖で歯道が外弯しており、鋸身幅の広い木葉型である。補強のない鋸身自立形式で、アゴをもつ。両側で塞は長く、装着法は差込式である。鋸身と塞の長さは約5対2である。

鋸身先端の5mm程と鋸歯の一部を欠損しているが、ほぼ完形品である。全面に青黒い凹凸のある酸化皮膜に覆われているが、剥落する赤錆はほとんどない。現状は全長482mm、鋸身長336mm、峰の反り1.25mmである。

塞は全長146mmで、先端は斜めに終わっている。幅は

20.0mmから6.5mm、厚さは3.9mmから2.58mmと漸減している。出土層には自然木等が多く遺存したが、茎や鞘の錆着は認められなかった。カツラはその痕跡も無く、目釘孔も無い。柄の装着法は差込式と考えられる。

間は直立する両間で、位置は若干ずれている。

アゴは長さ32mmと大きく内湾している。幅は鋸身の元で58.75mmだが、間部分では20mmである。

歯道は外湾しており、先寄り三分の一程に鋸身の最大幅があって69.5mmを測るが、元寄りでは58.75mmとやや狭く、鋸身先は鋭尖である。鋸身の厚さは酸化皮膜上で約2mm、重量224gである。しかし、同じ重量での復元鋸の平均厚は12mmになったそうである。出土例のような鉄鋼は、酸化すると体積は膨張するが重量増は数百分の一とのことであり、出土鋸本来の厚みは復元鋸とほぼ同じと推定されている。身の厚さは、先端部をやや厚くする一方、歯間よりも峰寄りに厚く、先端部近くよりも元寄りが厚い。

鋸歯は先寄りの刻みが細かく、元寄りをやや粗くするようにならされている。歯は先端の1寸に10枚、次の1寸に9枚刻まれ、以下は1寸あたり8枚で、計88枚が刻まれている。歯の大きさは底辺37.5mm、成は43mmで、歯道に対して手前に傾斜している。傾斜角は13世紀の草戸千軒町遺跡出土例⁶⁾よりも大きく、江戸時代以降のものと同程度になっており、いわゆるイバラ目である。アサリは鋸身の大きさに対してかなり大きく打ち出され、アサリ幅は27.5mmである。ナゲシ角も後世のものとはほぼ同じ15度になっている。

前述のような出土土器と鋸の耐用年数を考慮すると、その所産は14世紀後半の可能性もあるが15世紀前半の可能性が最も高く、15世紀中葉に廃棄されたものと考えられる。

錠前(第49図393、巻頭写真1、写真5・11) この錠前も、「北馬場館跡」の北面堀であるSD320の底部から、木葉型鋸や大型角釘・不明鉄製品等と共に出土したものである。当例の形状と構造は、近世以降に「海老錠」と呼ばれたものと同様である。

錠前の本体は、全長109.5mm、断面28mm×25.5mmという縦長の箱形を呈している。長方形板を底板とし、この両側縁を短く折り曲げ、断面コ字形に折り曲げて被せた蓋を受け止めて接合している。上端は小口板で塞いでいるが、この一部と接続する蓋材にかけてT字形の

鍵穴を開けている。底板と蓋板の下端近くは、2本の釘で留められている。この釘は、本体の補強と同時に鍵の重ね板バネを受ける部材にもなっている。下端の小口は開放とし、鍵の板バネの挿入口となっている。

本体内部には、長さ86.5mmの細長い足がコ字形に二股となった重ね板バネが錠前機構としてあり、開錠時には本体の中から下に滑り出る仕掛けになっている。

鍵穴は、上向きになった重ね板バネのコ字形の内奥部分に当たる。コ字形の頭部には別材を重ね、これを貫いて鉄留めとしている。この別材は厚さ3mmであるが、反対側を12mmと厚くして円孔を設け、掛け金を通してある。

掛け金は、本体の底板上端に蓋板まで貫いた釘で留め、これに円棒を直角に接合したものである。全長は228mmと長く、直径は上端で8mm、先端で6mmを測る。

角釘(a～c)は折り曲げて頭部に円環を作り、以下は接合したもので、3本が掛け金に通した状態で遺存していた。3本の釘は、上のaが全長78mm、下のcが75mmと短く、中央のbは先端を欠損している可能性があるが全長120mmとやや長い。

全重量は367.5gである。全面に青黒い酸化皮膜が覆っているが、剥落する赤錆はほとんどない。出土後間もなく清掃のうえ充分に乾燥させ、油を注して時間をおいた後に、古い農家の蔵に使われていた鍵を挿してみたところ、「カチン」と小さな音がして開錠した。自然木等と共に堀の底から出土したにも拘わらず、鍵としての機能は失われていなかった訳である。他の鉄製品と同様、酸素の供給が断たれた還元層に包含されていたことが幸いしたのであろうが、良質な鉄鋼による製品であることも物語つていよう。

その所産は14世紀後半から15世紀中葉の可能性もあるが15世紀前半の可能性が最も高く、15世紀中葉に廃棄されたものと推定される。

大型角釘(第49図394、写真5) 当例も「北馬場館跡」の北面堀SD320の底部から出土した⁷⁾。

全長は183mmで、断面は長方形を呈している。頭部下の断面は16.5mm×11.5mmだが、先端部では7.5mm×5mmである。頭部は強打されて四方に延びており、先端部は鋭利さを失っている。重量は165.0gを測る。

所属期は、やはり14世紀後半から15世紀中葉の可能性があるが、15世紀前半の可能性が最も高い。

不明鉄製品(第49図395 a～p、巻頭写真2、写真5・12)

同巧同形の不明鉄製品が、「北馬場前跡」の北面堀であるSD320の底部から鏡前等と共に出土した。入れ子状態で8点2列、計16点が並んでいた。

全点共、平底をもった深鉢状を呈している。鉄板を時計回り($i \sim k \cdot n$)あるいは逆時計回り($a \sim h \cdot l \cdot m \cdot o \cdot p$)に巻いて体部を作り、底板を接合している。1例(1)を除いて、口縁下に径5mm程の円孔を1方向にもつ。内面の中央やや下に円盤を水平において塞いでいる。この円盤は、中央に円孔をもつ例も少ない例がある。円盤と底板との間に何かのものが入っているが、意図的なものか後世の流入かは判然としない。口縁部の外径は31mmから35.5mm、高さは43.5mmから48.5mm、重量は53.6gから64.9gである。

所属期は、やはり14世紀後半から15世紀中葉の可能性があるが、15世紀前半の可能性が最も高い。

その他の遺構と遺物(第9・40・41図、写真4・5・12～

14) さまざまな形状の土坑類(SK328～336)や石組遺構(SX308)等がある。SK328は、近世の信楽製品や伊万里系の染付皿等が出土している。

SD320の埋土上面には石組遺構SX308の一部が検出された。北区のSX306等と同様なものであろう。

SK331からは、染付碗(355～357)や信楽焼碗(385)が出土している。

SK334からは、播鉢(343)が出土した。第三章でも「軟陶播鉢」として触れるが、当例は信楽焼よりも軟質で灰黄色を呈する。ロクロは成形に用いたか疑問で、縦横にナデを施している。内面には、5本一単位の櫛状具で大きく弧を描いて掻きあげている。信楽焼播鉢に似て異なるものである。

なお、調査区北西部を中心として少量の奈良時代の土器も出土している。おそらく、奈良時代の遺構は中世や近世の遺構によって削平されたものと思われる。

第3節 第四次(昭和56年度)調査

第四次調査は、AからEの5区に分かれている(第3図)。いずれも河岸段丘の東端のやや低い場所である。

なお、A・B・Cの3区は観音堂区、D・Eの2区は山ノ神区に属する。

(1) A区(第3・6表、第15図)

A区は、第三次調査北区に一部が北接する。石組土坑(SX409)と井戸(SE405)のほか、性格不明の浅い円形土坑等が認められた。

SE405(第17図、写真6) 調査区南西壁に接した石組みの円形井戸である。

掘り方は底径1m程であり、砂礫層まで掘り下げている。掘り方の底には径数cmの丸太を内法約0.9m(3尺)の井桁に組んで堰とし、この上に人頭大の川原石を組み上げて井筒としている。石組みの平面形は、堰に合わせた方形から次第に円形に変えている。また断面形は、堰から3尺程の上で内径が約1.05m(3尺5寸)と最大径となっており、おそらく中膨らみであろう。底部の標高は147.25mである。

遺物が出土しなかったために所属時期は不明であるが、近世前期に属するものであろうか。

SX409(第16図、写真6) 調査区南隅でその一部が検出された。人頭大の川原石を組んで池状にしているが、一部の石組みは直交している。

遺物はなく、所属期や性格は不明である。

(2) B区(第3・6表、第18図、写真6)

B区は、第三次調査北区や南区及び観音堂の東に位置する。浅い井戸状の石組遺構(SK437)や性格不明の石組遺構(SX410)及び瓦囲土坑(SK438)が検出された。

SX410(第20・42図、写真6・7・14) 調査区の南東部で検出された石組遺構である。人頭大の川原石で内面を描いて積み、2・3段を部分的に残す。石組は北に5m程張り出している。

石組みの乱れた部分から15・16世紀の信楽焼播鉢(410・416)が出土している。遺構の性格は不明である。

SK437(第19図、写真7) 調査区の北部で検出された円形の石組遺構である。

平面形は井戸と変わるところがないが、残存1m程で地山に達するため、井戸とは考えがたい。一部を破壊されているが、掘り方は上端で2～2.4m程である。人頭大の川原石を円形に組み上げており、その内径は0.6m(2尺)内外である。底部の標高は148.2m程である。

遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。

SK438(第18・42図、写真7) 調査区の東部で検出された円形の土坑である。外周には平瓦を立て並べており、内部には人頭大の川原石が詰まっていた。

近世の軒平瓦片(427)も出土している。

(3) C区(第3・6表、第4図)

C区は第三次調査北区に西接している。石組土坑SX306の北東部を検出した。

(4) D区(第3・6表、第21・22図、写真7) D区は山ノ神区の西方に位置し、主な遺構としては「北馬場館跡」の東面の堀であるSD420が検出された。

なお、地山上の土層(第21図の7～9)は厚さ0.2m程を残すのみだが、SD420に接して西に5m以上続いている。この土層は、「北馬場館跡」の東面堀の内側にあったであろう土塁の基底部の可能性がある。

SD420(第21・22・42・49図、写真7・8・14)「北馬場館跡」の東面中央部の堀と推定される。

幅約4.7m、遺存深1.6m程の葉研堀であり、東西に20m程検出された。底部の標高は148.75mである。

居館の存続期に堆積したものと考えられる下層は、加工木等や川原石が混じった還元層であり、土器類や木製遺物等が出土した。中層は、酸化した粘土が土塁の存在したであろう東側からブロック状に崩れ落ちて堆積したものである。上層には、ブロック状ではない酸化土が厚く堆積している。

遺物は、下層と上層から出土している。下層からは、15世紀中葉の信楽焼鉢(404)や14世紀後半と15世紀前半の甕(424・425)が、次に記す革芯漆塗小札(430・431)と共に出土している。また、自然木に突き刺さった鉄鎌をはじめ、茅負のように抉りと孔を開けた例や角材等という建築部材らしい加工木も出土している⁹⁾。一方、上層からは15世紀後半と推定される信楽焼甕

(426)等が出土している。

革芯漆塗小札(第49図430・431、巻頭写真1) 2例共、「北馬場館跡」の北面堀SD420の下層から出土した小札甲(挂甲)の小札で、盛上木小札である。小札は0.5mm程と薄くなって断片的に残るのみだが、牛革の並札と考えられる。これを2枚あるいは3枚重ねて綴り、黒漆を塗固めている。

これの所産は14世紀後半から15世紀中葉の可能性もあるが15世紀前半の可能性が最も高く、15世紀中葉に廃棄されたものと推定される。

(430)は表面のみの断片である。札頭を鋭く斜めに切り下げ、漆下地を山の裏まで施している。札丈は66mmから61mmであるが、札幅は8mmと狭い。本来の厚さは不明である。威孔は1孔ずつの第三まであり、綴孔は1孔4段をもつ。右側面と下端は生きており、裾に赤漆で花櫛を2段連ねている。

(431)は裏面のみの断片である。(430)と同巧であり、やはり札頭を鋭く斜めに切り下げ、漆下地を山の裏まで施している。札丈は65mmから50mmであり、札幅は18mmと広い。威孔は1孔ずつの第三まであり、綴孔は1孔4段をもつ点は変わらない。やはり本来の厚さは不明である。外面には黒漆を塗固めている。

SK451(第22・42図、写真14) SD420西側の土坑であり、近世の鉢や甕(415・422)が出土した。

(5) E区(第23図)

E区はD区の北東角に接しており、「北馬場館跡」の東面堀の存在を考慮して設定された。しかし、浅い近世の溝等が認められたに過ぎなかった。

第4節 第五・六次(昭和57・58年度)調査

第六次(第25図)では、調査区の南半部を第五次調査区(第24図)の下層調査とし、さらにこの北隣接地も調査した。このため、例言でも述べたように、遺構番号の百の位は調査年次を表わす一方、十の位までは両次を跨いだ通し番号とした(第3表)。また、遺物番号の百の位は調査年次に係らずに5とし、十の位までは両次を跨いだ通し番号とした(第7表)。

調査の結果、「北馬場館跡」の東面堀の一部が検出されたほか、弥生時代や古墳時代の土器類が出土した。また、上層では井戸等の近世の遺構が多く認められた。

SE501(第26図、写真8・9) 調査区の南部に所在し

た円形の石組みの井戸である。崩壊の危険があるために掘り方の調査はできなかった。

掘り方の上端は径265～285mの不整形円形である。底に置いた川原石の上に径10cm程の丸太を内法約0.75m(2尺5寸)の井桁に組んで甕とし、この上に人頭大の川原石を組み上げて井筒としている。石組みの平面形は、甕に合わせた方形から次第に内径3尺の円形に変えている。また断面形は、甕から残存する上端までほとんど変わらずに直線的である。甕下端の標高は約148.1mである。

遺物に恵まれなかったために所属時期は不明である

が、中世後期に属するものであろうか。

SE502(第27図、写真9) 調査区南端に所在した円形の石組井戸である。やはり崩壊の危険があるために底までの掘削や掘り方の調査は断念した。

上端は径24～27mの不整形円形である。下部には径10cm程の丸太を井桁状に組んだものが見られたが壁ではなく、石組みはさらに下に続く。人頭大の川原石を上になる程やや広がるように組み上げており、内径は下方で約9m(3尺)、上部で約12m(4尺)を測る。検出できた範囲での石組みの断面形は直線的である。標高は、検出できた最下部で約1479mであった。

やはり遺物に恵まれなかったために所属時期は不明であるが、中世前期に属するものであろうか。

SX523(第24・43図) 調査区の北端に広がる、集石を伴う溝状遺構である。複合遺構の可能性はある。

土師器皿(507)や灰釉皿(511・512)と信楽焼の灯明皿(513)や埴(519・528・529)等が出土した。

SE603(第28・43図、写真9) 調査区の中央部に所在した円形の石組みの井戸である。上部はすでに崩れており、崩壊の危険のために掘り方の調査は断念した。

掘り方の上端は径185～190mの不整形円形である。掘り方の底に置いた川原石の上に径数cmの丸太を井桁に組み、内法ではなく外法で約9m(3尺)の框としている。さらに、この上に人頭大の川原石を組み上げて井筒としている。石組みの平面形は、框に合わせた方形から次第に内径0.75m(2尺5寸)程の円形に変えている。また、断面形は残存する下半部を見る限り下膨みである。底部の標高は約1478mである。

信楽焼の播鉢片(506・525～527)が出土しており、近世後期に属するものと考えられる。

SE604(第29図、写真9) 調査区の北部に所在した円形の石組みの井戸である。崩壊の危険があるために

掘り方は24m以上掘り下げることができなかった。

掘り方は、径175～200mの不整形円形である。人頭大より小粒な川原石を組み上げ、内法0.6m(2尺)程の井筒としている。底部の標高等は不明である。

遺物に恵まれなかったために所属時期は不明であるが、近世に属するものであろうか。

SD620(第25図、写真10) 調査区北西の南北溝であり、「北馬場館跡」の東面南部の堀と考えられる。

業研堀であり、幅は62m、遺存深は約2.45m、底部の標高は約1488mである。

SD630(第25・43図、写真10・12) 調査区の南部に所在した、幅40～624mに対して遺存深0.4m程の浅い東西溝である。

弥生時代中期後葉の竈(501)が出土した。外弯する口頭部には凹線文、頸部直下には縷状文、以下には3帯の櫛描横線文と2帯の櫛描波文を交互に施している。

SD631(第25・43図) 調査区南部のSD630の北側に並ぶ東西溝である。

蛇行気味であり、調査区の西半部では攪乱によって不明である。幅は274mから0.7mと一定せず、深さは0.3m程を残していた。

古墳時代初頭の土師器甕(502～504)が出土した。タタキを残さない例(502)や内面ケズリの例(504)がある。

その他の遺構(第24・25・43図、写真8～10) 調査区南半は上層の調査であり、上記以外にも近世の遺構が検出されている。

SX507やSX528は第三次のSX306と同様な石組みの池状遺構であり、前者の南北には石組溝が伴う。

SX519も長方形の遺構で川原石が多いが、内側に面を揃えた池状遺構とは異なる。

SX512も石組みの池状遺構であるが、第四次調査B区(SX410)と同様に張り出し部分がある。

第5節 第七次(昭和60年度)調査

第七次調査は、AとB-1～3の4区に分かれている(第3図)。A区は観音堂の跡地であり、B-1～3区は山ノ神区で「北馬場館跡」の堀の検出を目指した。各調査区共に河岸段丘の東縁のやや低い地点に位置する。

(1) A区(第3・8表、第31・44図、写真14)

A区は、観音堂の所在した場所であった。しかし第I章でも触れたように、この祠に祀られていたのは観

音菩薩像ではなくて元亨元(1321)年銘の板碑である。この板碑は、付近に放置されていたものを数十年前にこの祠を建てて祀ったものとのことである。事実、調査の結果では板碑に関わる遺構や遺物は認められず、SK701とした浅い落ち込みが検出されたのみであった。

15世紀の信楽焼播鉢等(701～706)が出土した。

(2) B-1区(第3・8表、第36・44図、写真10)

B-1区は、「北馬場館跡」の北東隅の堀を念頭に設定された。その結果、堀の北東隅(SD701)と、土塁の内側に取り付くらしい溝(SD702)等が検出された。

SD701(第36・37・44・48図、写真10) 「北馬場館跡」の北東隅の堀と考えられるものである。

遺存した幅は52～63m、深さは12～14mであり、底部の標高は14862～14915mを測る。北辺部では箱葉研堀であるのに対し、東面は葉研堀になっている。

埋土は、酸化層である上層と、還元層である下層に大別される。調査区西壁での下層はなだらかな堆積であり、安定した存続期を示唆している。上層は、堀の内(南)側にあったはずの土塁から短期に流入したらしい厚い土層からなり、この部分は人為的に埋め戻された可能性が高い。この上層の下部には自然木が混じり、上部には人頭大の川原石の混入が認められた。

東面北部の土層も、酸化した上層と還元した下層からなる。下層には自然木も認められた。上層は穏やかに堆積しており、短期に埋め戻した様子はない。

下層を中心に、15世紀中頃の信楽焼燗鉢(720～722)等が出土した。

SD702(第36図) SD701の約65m南西にあり、北から南に折れ曲がっている溝である。

遺存した幅は14～16m、深さは07m程である。

遺物は出土しなかったが、「北馬場館跡」の北東隅の堀と考えられるSD701の約65m内側(南西)裾にあることから、土塁の内側に取り付く溝と推定される。すると、土塁は基底部の幅が約65mだったことになる。

(3) B-2区(第3・8表、第32・45図、写真14)

B-2区は、「北馬場館跡」の郭内東部に位置する。

SD702(第32・45図) B-1区で検出されたSD702の南延長上にあり、このSD702は「北馬場館跡」の東面土塁の内(西)側裾に沿う溝と考えられる。

遺存した幅は最大16mである。埋土は褐色系の砂質土であり、短期に埋没したと推定される。

古墳時代の土師器(731・732)のほか、中世の土師器皿や埴等も出土している。

SD703(第32・45図) 南北溝SD702の西側で東に延び、直行する直前で途切れる溝である。

幅約1m、深さ約06mが遺存した。SD702に類似した埋土であり、短期に埋没したものと推定されている。

埋土上層からは、「寛永通寶」(752)が出土している。

SD704(第32・48図) 東西溝SD703の南側にはほぼ並行し、やはり同様な位置で途切れる東西溝である。遺存した幅は2m程で、深さは06m程である。

埋土の上層からは、川原石に混じって宝篋印塔の基礎(791)が出土している。

SE705(第33・45図) 崩壊と湧水のために不明な点が多いが、人頭大の川原石を組んだ内法1m程の円形の井戸と推定される。

既報告によると、掘り方は一辺4m程の方形とされている。しかし、古墳時代の須恵器(737)が出土しており、当遺跡の他の石組井戸の掘り方はすべて円形である。したがって、古墳時代の堅穴住居に重複して近世の井戸が掘られた可能性も残る。

(4) B-3区(第3・8表、第34図)

当調査区は、「北馬場館跡」の南東隅に位置する。

SD701(第34・46・47図) 「北馬場館跡」の南東隅から北に延びる堀と考えられるものである。

遺存した幅は55m、深さは約12mであり、底部の標高は約1487mを測る。断面形は、北辺部が葉研堀であるのに対し、以南は箱葉研堀になっている。

埋土は、酸化した上層と還元した下層に大別される。下層には、自然木や川原石は認められなかった。

下層出土の遺物には15世紀前半の例(773)がある一方、上層には近世の信楽焼製品(764～766・774・776・777・781・782・784・789)が多く、この部分は18世紀まで埋まりきっていなかったと推定される。

SE706(第35・46図、写真10) 「北馬場館跡」の東外側にある、円形の石組みの井戸である。

掘り方は底径約21mである。人頭大よりも小さい川原石を内径09m(3尺)前後に組み上げて井筒としている。石組みの平面形は底部から円形で、断面は筒形で例外的に浅い。底部の標高は14855m程である。

土師器の皿(756・759)や埴(757・758)と瓦質埴(760)等の破片が出土している。土師器皿は、いずれも薄手で底部と口縁部が直線的であり、中世後期に属する。

SK707(第34図) 調査区の南西端にあり、「北馬場館跡」の堀の南外1m程に位置する。

全形や規模は不明だが、検出した最深部は0.3mを測る。近世の陶磁器類が出土している。しかし、下層からは古墳時代の須恵器等も出土しており、下層遺構が存在した可能性も否定できない。

第三章 考察

第1節 遺物について

信楽焼播鉢の編年問題(挿図表D・E) 中世伊賀の考古学的研究において、信楽焼の播鉢はその豊富な出土量から重要なタイムスケールとなっており、その編年作業は生産地である信楽地方を中心に精力的に進められている⁹⁾。特に、初期の常滑写しの段階の究明は重要である。しかし、こうした初期例は消費地である伊賀地方では未確認であり、量産体制以前であったと考えられる。それはともかく、一般に窯跡出土例を中心とした編年作業にありがちなことだが、一括性ほどには型式的な検討は重視されない感みやや残るように思われる。

一方、筆者もこの下部遺跡の出土品を中心として編年を試みたことがある¹⁰⁾。しかし、これは消費地出土品であるために型式論的作業仮説の成を出ておらず、生産地での研究と併せて止揚すべき課題が残されている。具体的な課題としては、第一に何を型式分類の規定的要素と見るかであり、第二に全てを型式論的に同一組列と見るか、である。

第一の「何を型式分類の規定的要素と見るか」については、播目を重視する場合が多い。しかし筆者は、常滑写し後から近世初頭の時期は、口縁部形態を規定的要素と見做している。確かに、播目にも甕から櫛状具へ、櫛状具も多条化するとともに密に施されるようになる、という型式変化が見られる。しかし、この変化は漸移的であると共に他地方からの技術的影響という他律的变化もあり、型式細分の規定的要素としては不適当と考えた。播鉢の機能である播目を型式論的に最重要視することは、一般原則としては正しい。しかし中世の信楽焼播鉢の場合、播目は他地方の技法を試行的に導入して重層的に変化しており、型式論的に必ずしも整然とした変化を遂げてはいない。一方、口縁部の形態は、初期の

常滑写しの時期を除く近世初頭までは自立的・一系的発展を遂げている。したがって当該期は、やはり口縁部を型式変化の規定的要素と見なすべきであろう。

第二の「全てを型式論的に同一組列と見るか」については、少なくとも2組別はあると考えられる。挿図表D図のように⁹⁾、口縁部内面にナデを施す「内面系」と呼んだ一群と、口縁部端へのナデによる外反・沈線化という一般的で「端面系」と仮称できる一群がある。これらは窯跡出土の一括資料の中にも共伴することから、時間差や地域差ではなくて組列の相違と認識するべきであろう。

近世焼物の状況 下部遺跡では近世の焼物が多数出土しており、その傾向を以下に概括しておく。

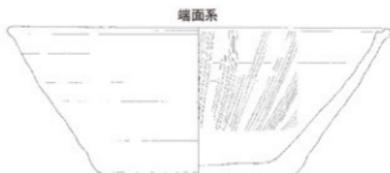
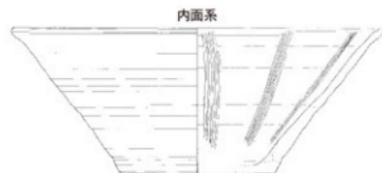
中世末から近世初頭には、播鉢や甕等という信楽焼の日常品を中心とし、天目茶碗や灰釉皿等の瀬戸・美濃系の製品も一般的な構成要素となっていた。

17世紀には美濃系の皿等も見られるもの、瀬戸・美濃系は次第に影を潜める。

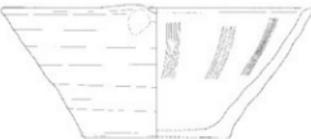
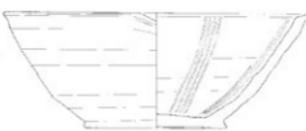
18世紀後半以降は、信楽焼の播鉢は次第に減少するが、坑類や皿等という信楽焼の京焼風小物が目に付くようになる。また、伊万里系の染付碗も普及し始める。

このように、当遺跡の近世資料はこれまで不明であった消費地である近世伊賀における焼物の実態を知る貴重な資料である。但し、復古伊賀や京焼等との関係は今後の課題である。

軟陶播鉢(挿図表F) 下部遺跡に限らず、中世伊賀の遺跡からは、信楽焼播鉢に混じって似て非なる播鉢が少量ながら普遍的に出土する⁹⁾。それらは軟質の陶製品であり、一般にくすんだ灰黄色を呈している。播目は多条の櫛状具で強く弧状に掻き上げている。また、外面には明瞭なクロコナデはなく、ハケメさえ見られる。



挿図表D 信楽焼播鉢の2組別

実年代	型式	典 型 例	器種	掻目		色調	焼成	器厚
				本数	間隔cm			
1300	I		鉢	(ク シ 3	(7 5 5)	(乳 白 色)	(軟)	()
1350	IIa			(へ 4)	(6 5)	()	()	(厚)
1400	IIb		鉢	ラ (ク シ 3 5	(5 4)	()	(や 軟 黄)	()
1450	IIIa			()	(3)	(茶 色)	(や 硬)	()
1500	IIIb		鉢	ク シ 5	(5 4)	()	()	(薄)
1550	IVa			本 主 体	(3 1)	(茶 褐 色)	(茶 褐)	()
1600	IVb		()	(2 1)	()	()	()	

挿図表 E 信楽焼練鉢・掻鉢の型式編年図 (「常滑写し」の直後から近世初頭まで、註①文献の図を改変、IIIbとIVaは註②文献から複写)



挿図表 F 軟陶播鉢の例

胎土には金雲母片を多く含むが、長石は目立たない。口縁部の形態は「内面系」に類似する。

こうした特長から、典型的な信楽焼のようなロクロのみによる成形ではなく、焼成温度も低かったと推定される。また、信楽焼のような山間部の胎土ではなく、より平地で生産された可能性が高い。播目は大和の瓦質播鉢に類似するか瓦質ではなく、甘い焼きながら陶質である。これらの要素からは、成形や焼成の技術が低く、信楽や大和の影響を受けた、里での生産品と考えられる。

このように、信楽焼や大和産に類似する要素をもつが全体としては独自のものである。また、管見の限り伊賀地方以外では見かけない。したがって、中世において伊賀のどこかで小規模に生産されたものの可能性がある。このような一群を仮に「軟陶播鉢」と名付けて注意を喚起し、今後の研究を待ちたい。

木葉型鍬(挿図表 G) 「北馬場館跡」出土の木葉型鍬(392)についてはその詳細を前章(6・7頁)で報告した。また、木葉型鍬一般については既述の註の文献や参考文献等で詳論されている。したがって既往の指摘との重複もあろうが、目に付いた点を以下に触れておく。

第一に、木葉型と呼ばれる内での形態変化とその理由である。すなわち、小型で細身のものから当遺跡例のように大型で幅広いものへと変化していることは周知

9～13世紀



広島県・白石洞窟遺跡

13世紀



広島県・草戸千軒町遺跡

15世紀前半



三重県・下郡遺跡

挿図表 G 木葉型鍬の変化(註8)

の事実である。では、なぜ幅広いになったのか。それは、あまり力を入れない片手挽きの工作具から強い力が必要な両手引きの大工道具への変化に対応しており、鋸身の強度を上げる工夫の結果ではなかろうか。厚みを増すことは機能を落とすためにできない以上、鋸身の強度を上げるためには幅を広げる以外に方法がなかったであろう。工作具から大工道具へとという観点で、歯の傾斜角やアサリ・ナゲンの変化も同様に理解できよう。歯道の変化も同様である。

第二は、歯道の変化に伴う最大幅の位置の変化である。最大幅は、9世紀から13世紀とされる白石洞窟遺跡例では元寄りにあり、13世紀の草戸千軒町遺跡例では中央にあり、15世紀前半頃の下部遺跡例では中央よりやや先寄りにある⁸⁾。14世紀前半頃の「松崎天神縁起」や「石山寺縁起絵巻」に描かれた例でも中央付近に最大幅があり、考古資料の変化の流れと調和的である。

以上のような事実は、より強く大きい動作で挽き易い形態へと進化した結果と考えられる。やはり、小型で片手挽きの工作具から大型で両手挽きの大工道具への変化を反映しているものであろう。

第2節 遺構について

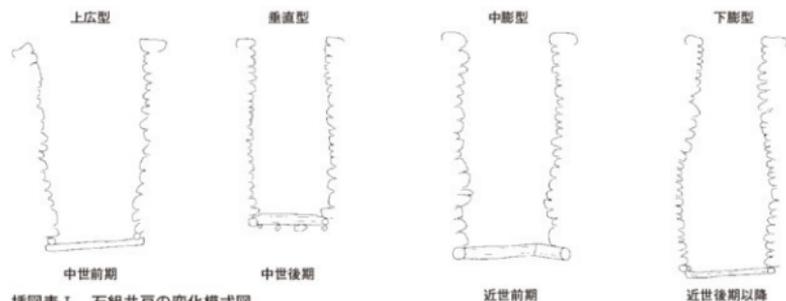
石組井戸(挿図表 H・I) 下部遺跡では、中世から近世にかけての井戸が9基程と比較的多数が検出された。これらは、標高148m前後の透水層である砂礫層にまで掘り下げ、直径10cm程の丸太を井桁に組んで堰とし、この上に入頭大の川原石を組む。石組みの井筒の平面形は、下部では堰のとおり方形だが、上に向かうにたがって円形に組まれている。堰は内法が90cm(3尺)程の例が多いが、外法が90cmのものや内法が75cm(2尺半)程の例もある。地上の構造は不明である。

以上のような強い齊一性を備える一方、井筒の断面

形は、上広型：直線的に上に向かって広がる例、垂直型：垂直な例、中影型：中影らみの例、下影型：下影らみの例、と分類できる。出土遺物が少ないために不確かだが、このような石組み井筒の形態変異は時期差の可能性が高い。おそらく上広型は中世前期、垂直型は中世後期、中影型は近世前期、下影型は近世後期以降の所産であろう。上広型は石組みの容易さに起因し、下影型は構築技術の高度化に裏づけられた貯水量の向上を目指した結果であり、その他は上広型から下影型への技術的な発達過程を示すものと理解される。

遺構名	地区名	底部標高 (m)	井桁 (m)	井筒断面	時期
SE303	第三次北	147.75	内法0.9	下彫型	近世後期か
SE304	第三次南		内法0.9~1.2	上広型	中世前期か
SE405	第四次A	147.25	内法0.9	中彫型	近世前期か
SE501	第五次	148.1	内法0.75	垂直型	中世後期か
SE502	第五次	147.9	内法0.9~1.15~	上広型	中世前期か
SE603	第六次	147.8	外法0.9	下彫型	近世後期
SE604	第六次		内法0.6		近世か
SE705	第七次B-2		内法0.9か		近世か
SE706	第七次B-3	148.55	内法0.9		中世後期

挿図表 H 石組井戸一覧表



挿図表 I 石組井戸の変化模式図

北馬場館跡(挿図表Ⅰ・第2図) 下部地区の中世城館としては、「加納氏堡」と「石田氏堡」が推定されていた。ところが、市教委と調査会の調査で「法寺寺地区」から「下代館跡」⁹⁾、さらに当報告のとおり「北馬場館跡」という、未知の城館跡が検出された。これらは小字名をとって館跡名としており、館の主は推定するほかない。以下、「北馬場館跡」に関して若干の検討を加えておく。

まず、館跡であるかの確認が必要であるが、その点は第三次南区のSD320と第七次B-1区のSD701、第四次D区のSD420、第六次のSD620、第七次B-3区のSD701が一連の堀と認められるかが重要である。また、周辺の地形も検討する必要がある。

一連の堀とするには、各々の位置関係と規模や形態(幅・深さ・断面形)及び存続期が共通している必要がある。このうち、位置関係は挿図表Ⅰにみるように一連のものとして問題あるまい。

規模の内、幅はいずれも4.5mから6.3mが残存していた。したがって、堀幅は本来6m余りと判断され、伊賀の中世居館の堀としては妥当である。深さは、いずれも標高148.6mから149.15mである。その差は0.55m程であるが、60m余りの範囲であることと素掘りであ

ることを考慮すると、堀底の絶対高に有意の差は無かったと云えよう。また、各調査区の埋土下層は還元層であったが同層の上面は同一地点でも0.2m程上下しており、標高は149.6mから149.8m程であった。したがって、一連の堀として水を湛えていたと推定できる。さらに、堀の断面形は一部が箱葉研だが基本的には葉研堀であり、中世城館の堀として相応しい。

存続期は、各調査区の堀の下層出土遺物から14世紀後半から15世紀中葉と判断される。廃絶期は、堀上層出土遺物によって15世紀後半から16世紀にかけてと推定される。但し、南東部である第七次B-3区では18世紀までの近世遺物が目立つことから、堀の一部は近世中期まで埋まりきってはいなかったと考えられる。それほど多く、各調査区の出土遺物から15世紀前後という共通した存続期が推定でき、一連の堀であることを否定する要素はない。

また、堀の内(西)側の一部(第四次D区)には、土塁の基底部の可能性がある土層が認められた。さらに、土塁の内側堀に囲っていたと推定される溝も一部(第七次B-1・2区のSD702)で検出されており、土塁の基底部幅は6.5m程と推定された。但し、居館内の他の遺構は



挿図表 J 北馬場館跡推定図 (1/1000)

調査できなかつた地点もあり、調査できた地点でも遺構は認められなかつた。

周辺の地形からは、比高2m程の河岸段丘の東縁に立地していることが窺える。また、45m程西に南北の細い水田が認められ、これが西面堀と推定できる。

以上の諸点から、一連の遺構は中世居館の堀として問題なかろう。幅6m余りの堀と基底部幅6.5m程の土塁が明確する単郭環濠式で、全体規模は堀の外法で南北約62m、東西約53mと推定される。おそらく14世紀後半には造られ、15世紀中葉に廃絶し、15世紀後葉から16世紀にかけて堀の埋没が進んだが、一部では18世紀まで埋まりきれなかつたものであろう。

遺跡名に関しては、この付近からは輪郭口や鉄滓も出土しており、当地の古地名である「カナヤシキ」と関連する可能性も否定できない。しかし、この北西は「加納氏堡」推定地であることから、「カナヤシキ」は「加納屋敷」の転訛であり、「北馬場館跡」が加納氏の居館跡である可能性の方が高いと考えられる。とは言え、他に根拠もないまま「三國地誌」等の非同時代史料を安易に当てはめることには慎重でありたい。「北馬場館跡」の場合は堀の一部は「三國地誌」の時代まで埋まりきらなかつたようだが、それが当時まで城跡として認識されていたか、ましてその主は誰だったと正しく伝えられていたかは疑わしい。「下代館跡」のように「三國地誌」編纂期までに埋没していた例も多い点も考慮すべきである。当居館跡は「加納氏堡」に相当する可能性が高いが、その

名称は小字名から「北馬場館跡」としておきたい。

なお、この北馬場館跡で特に注目し値する点は、堀から木業型鋸や錠前・大型角釘・不明鉄製品をはじめ葦芯漆塗小札の断片や建築部材らしい加工木が廃棄されており、鉄鎌の突き刺さった自然木も出土したことである。そして、これらは居館の廃絶期のもものと推定される。云うまでもなく鉄鎌や小札は武器であり、これらは戦闘のあったことを示唆している。また、木業型鋸や錠前等は当時において非常に貴重な品ではなかったが、損傷もしていないままで廃棄されている。平時ならたとえ損傷しても修理や再利用したはずであり、損傷もしていない貴重品を廃棄するとは考えがたい。この点も平時ではない状況、すなわち戦闘を想定させる。

15世紀中葉は応仁の乱(1467～1477年)が起きた時代だが、北馬場館跡はこの頃の戦闘で廃絶し、武器片や貴重な鉄製品類が廃棄されたのであろう。また、建築部材らしい加工木の廃棄から家屋の破却も推定される。伊賀の中世城館における暮らしりと共に、戦闘とその惨禍を生々しく伝える資料として貴重である。

伊賀の中世城館(第1・2図) 移転前の下部地区は南北900m、東西300m弱の範囲に広がる集落だったが、この付近で下代館跡と北馬場館跡が発掘調査で発見された。また、別に「石田氏堡」推定地もある。

伊賀の中世城館跡は、600箇所以上あるが、この内の居館跡は、下部のように同一集落に少数ながら複数存在するものが通例である³⁵。そして、そのほとんどを占めるものは、北馬場館跡や下代館跡のように小規模な単郭環濠式である。一方、丘陵上に多数の郭を構えた大規模なものも少数ながら存在する。要するに伊賀の中世城館跡は、圧倒的多数を占める単郭構造の小規模なもの、少数だが複郭構造の大規模なものに大別できる。

一般に、何らかの武装を施した居館は武士の台頭した平安時代後期から推定できるが、伊賀において考古学的に確認できる早い例は13世紀後葉を前後する頃である³⁶。一方、伊賀に多い小規模な単郭構造の居館跡の発掘調査された例では15～16世紀の遺物を中心とするが、14世紀後半の遺物も混じる場合が多い。したがって、詰城はともかくとして居館の場合は、14世紀後半に出現したものが多くと推定される。但し、14世紀の遺物は15～16世紀に比べて少ないことや、前身建物の確認された例もあることから³⁷、15世紀中葉すなわち

応仁の乱の頃に「構え」を本格化した例が多いと推定される。また、この頃に新規構築された例もあろう。さらに、天正伊賀の乱(1579 - 1581年)に際して改修されたものも多かったと考えられる。一方、詰城は天正伊賀の乱に対応して築かれた例が多いのであろう。

なお、方法論としては、詰城は武装化した居館の特殊発展形態であることから、城館の発生論や本質論は詰城ではなくて居館から考察する必要がある。

ところで、中世城館は応仁の乱による治安の乱れに対して土豪が自衛のために居館を武装化したもの、と一般に理解されている。では、土豪達は本質的に誰に対して「構え」を構築したのであろうか。もちろん、土豪間の抗争に備えて武装化を進めた面もあったであろう。しかし、中世後期の大きな時代的特徴は「一揆体制」にあったという歴史的事実も看過できない。「一揆」とは、土豪層が「一味同心」した連合である。したがって、土豪相互の抗争は表面現象であり、相互の抗争を越えた歴史的本質は「一揆体制」にあったと理解するべきであろう。同一集落に複数の居館が同時存在した事実も、「抗争」よりも「一揆」に本質があったとの理解に整合的である。

では、なぜ抗争しながらも「一揆」すなわち連合したのか。その本質的な理由は、土豪層の歴史的性格に求められよう。土豪層とは、封建的領主権を独自に実現できない程に弱小な小領主層すなわち地侍層を圧倒的多数とし、封建的領主権を独自に実現し得た少数の国人層も含んでいる、と理解される。この圧倒的多数を占める小領主層は、集落に居館をおいた上層民でもあった。

第3節 下郡遺跡の歴史的世界

下郡遺跡は、第1章でも概観したように、各時代を通じた集落跡であった一方で郡衙も置かれたらしく、中世には城館も営まれていた。こうした下郡遺跡を取り巻く歴史的環境に関して、調査を通じての所感を以下に若干述べておくこととする。

伊賀郡条里の坪並(第2図、写真1) 下郡集落の付近一帯には、圃場整備事業や木津川改修に伴う集団移転事業の前まで、東偏2度程度の長地型条里地割が明瞭に認められた。そして、条里の坪並を示すと考えられる「二ノ坪」や「余ノ坪」という古地名も遺存していた²⁸。

伊賀郡の条里は、条が北から南に、里が東から西に敷き込んだと推定されている²⁹。しかし、坪番号の進行

しかしその居館は、小規模とはいえ単郭環濠式という「構え」をもって武装化したものであった。これは、単なる地主的性格の集落上層民ではなく、伝統的な職の体系に基づいた侍身分すなわち「地侍」であったことを示している。居館の「構え」も彼ら自身が構成する在地権力によって承認された身分秩序の表徴という側面もあったと考えられる。居館主の歴史的性格は、単に軍事史だけではなく、経済関係論や身分制論も併せて検討する必要がある。

集落という生産点に立脚しながらも直接生産者に対して加地子取取権を保持していた彼らは、単独でこの既得権益を維持するにはあまりにも弱小であった、と彼らの居館跡の群小性から推定される。このような領主権を独自に実現し得ない程に弱小だった彼ら小領主層は、旧来の領域的権力が弱体化した14世紀後半頃から、在地の司法・警察権力を地域的一揆体制によって自身のものとし、加地子取取権の相互保障体制を実現しようとしたのであろう。これが伊賀における中世城館出現の本質的契機であったと考えられる。

領域的権力の弱体化した時代において、加地子取取権を巡ってそれを保持していた地侍層と国人層及び地侍層内部での競合・抗争は必然的に激化したであろう。しかしそれ以上に、加地子取取権の保持という直接生産者(農民)との関係における本質的な共通利害が「一揆」を普遍化させたと考えられる。武装化した中世城館の「構え」は、他の土豪に対する面もさることながら、より本質的には農民に対して向けられていたと理解される。

方向、すなわち坪並の進行方向は不明である。そこで仮に下郡の猪田神社前の坪を起点として数えると、北に4・5坪分、東に3坪分進んだ坪の中に残っていた古地名が目ざされる。

具体的には、北4・5坪目の中に「二ノ坪」、北4坪目に「四ノ坪」と解釈できる「余ノ坪」というものである。これらの古地名が示す範囲は不明確である。しかし、「二ノ坪」を北5坪目、「余ノ坪」を北3坪目とすると、坪番号は北から南に「一から六」へ進んだものと推定できる。但し、千鳥式か並行式かは不明である。しかし、伊賀国の他の3郡がいずれも千鳥式であったらしいことから、伊賀郡も千鳥式であった可能性が高からう。

下郡の猪田神社(第1・2図) 下郡は木津川の河岸段丘上にあり、周辺の水田は本流の木津川ではなく支流の矢田川から取水している。この用水路の「一之井堰」が猪田神社の前(東)にあり、下流(北方)には「尻井堰」がある。そこで、「猪田神社」は最も重要な「一之井堰」の前に祀られた水分神社だったとの説もあり^①、説得的である。また、中世末の「水聞記」を引用した「伊水温故」に拠れば、「猪田」は昔「井田」と書かれていたという^②。したがって本来は「井田神社」であり、「猪田郷」の地名起源となったと考えられる。そしてその後、この「井田」の地に(評)衙が移転したために「下郡」や「上郡」の地名が生じたのであろう。この結果、伊賀郡衙に対応した郡の宮としての社格を有していたと推定される。

また、社前の水田にあった小塚「鷲の森」には、延暦3(784)年に住吉神と銘のある白羽の矢を啜えた鷲が飛来したという^③、住吉神の動静録にも伝えられている。

さらに、この社殿の裏山には平安時代末の猪田神社経塚群が営まれている。これは、水分社としての井(猪)田神社を拝む時に自ずとこの経塚も拝むことになるように、意識して選地されたものと推定される。そこには、地域共同体の神を特定一族の祖先神へと変質させようとする意図が窺え、在地有力者が領土化していった時代を反映していると理解される。

猪田の猪田神社(第1図) 下郡の「猪田神社」とは別に、同名の神社が北北西500m足らずの猪田地区にもう1社ある。但し、両社共に明治以前は住吉社と呼ばれていた。なお、猪田の現在の社殿は重要文化財であり、大永7(1527)年の建立である。

北に延びる参道から猪田の「猪田神社」を遠望すると

背後の山は均整のとれたコニーデ形であり、神奈備山とされている。さらに、この山中には「日月石」と呼ばれる円形と三角形の花崗岩があり、磐座と考えられている。しかし、社殿は参道から東に折れた方角にあり、裏にはかつて開口していた横穴式石室をもつ県史跡の円墳である猪田神社1号墳が所在する。参道と社殿の向きの違いは、信仰の対象が神奈備山から古墳に移った歴史を反映しているのであろう。また、参道からやや離れた場所だが、境内には「天真名井」が所在する。同じく水を祀りながら、下郡の猪田神社が水分の井堰であるのに対して、猪田の猪田神社は湧水井である。こうしたことから、下郡と猪田の「猪田神社」は同名だが、全く別な縁起をもって成立したものと推定できる。但し、水源の違いによる各々の水祭祀のあり方は普遍的と云えよう。

以上のように、猪田の猪田神社祭祀の古相には、神奈備山と磐座及び真名井、古墳という3種が窺える。神奈備・磐座信仰と真名井信仰との関係は不詳であるが、両者は井堰設置に伴う水分信仰よりも古体を留めている可能性もあろう。

一方、横穴式石室の再利用は伊勢では13世紀頃に多いが、伊賀では12世紀頃に目立っており、おそらくこの頃に信仰の対象が猪田神社1号墳に移ったのであろう。このような古墳の再利用は、おそらく開発領主が開発地の私有化を正当化するために自からの祖先神として古墳を祀り始めた「開い込み」の痕跡と理解される。

上記のような解釈が可能なら、下郡と猪田の両猪田神社は古代からの共同体の神が12世紀頃に領主層主導の神として変質されていった歴史をもつ、という共通性があったと理解できよう。

〔註〕

- ① 中森英夫・山田猛・山本雅靖「下郡遺跡発掘調査報告」(上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会、1978年)。
- ② 下記の報告がある。
 - a 山田猛「下郡遺跡試掘調査概報」(三重県教育委員会、1979年)昭和53年度第一次試掘調査。
 - b 山田猛「下郡遺跡第二次試掘調査概報」(三重県教育委員会、1980年)昭和54年度第二次試掘調査。
 - c 山田猛「下郡遺跡第三・四次発掘調査概報」(三重県教育委員会、1982年)昭和55・56年度本調査。
 - d 中森英夫・吉水康夫「下郡遺跡昭和55年度の発掘調査」

- (三重県教育委員会、1984年)第五・六次本調査。
- e 倉田守「下郡遺跡発掘調査報告-第七次調査-」(三重県教育委員会、1986年)第七次本調査。
- ③ 嘉米國夫「中世の大工用鋸(木の葉型鋸)」(『全建ジャーナル』2、社団法人 全国建設業協会、1986年)。
- ④ 山田猛「下郡遺跡群出土の楯鉢」(『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年)。
- ⑤ 各遺跡については、個別の報告書に拠ったが割愛した。そのほかに、参考文献に拠るところが多い。
- ⑥ 下記を始め、註①の文献でも指摘している。

- a 大西源一『三重県郡史』(三重県警察部、1939年)。
 b 山田猛『夏見庵寺の研究』(夏見庵寺研究会、2002年)。
 ⑦ 註①に同じ。
- ⑧ 太田古朴・今西正巳の両氏にご教示を得、下記文献も参考とした。
 a 伊賀市『伊賀市史 第四巻 資料編 宗門』(2008年)。
 b 伊賀市『伊賀市史 第一巻 通史編 宗門』(2011年)。
- ⑨ 註②のa・bに同じ。
 ⑩ 註③に同じ。
 ⑪ 星野欣也ほか『わが国中世のいわゆる“木の葉型窟”について—出土品を参考にした形状復元と機能追及—』(『竹中大工道具館研究紀要』第1号、竹中大工道具館、1989年)。
 ⑫ 註②cの概観では「鑿」としたが、当報告では「大型角釘」と修正しておく。
 ⑬ 鉄線刺された自然木や加工木は現存しない。
 ⑭ 以下、代表的な文献のみを記す。
 a 滋賀県立陶芸の森「研究集会『近世信楽焼をめぐって』報告書』(2001年)。
 b 畑中英二『信楽焼の考古学的研究』(サンライズ出版、2003年)。
 c 畑中英二『続・信楽焼の考古学的研究』(サンライズ出版、2007年)。
 ⑮ 註④に同じ。
 ⑯ Ⅲbは下記aから、Ⅳaは下記bから転載した。
 a 福田典明『蓮花寺跡推定地遺跡発掘調査報告』(上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1997年)。
 b 森川常厚『Ⅱ 上野市羽根 箕升氏館跡(北城遺跡)』(『伊賀国府跡(第5次)・箕升氏館跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1993年)。
 ⑰ この問題については、註①の文献でも触れた。
 ⑱ 挿図表Gは、下記の文献の第29図を参考し、一部を改変した。
 渡邊品『大工道具の日本史』(吉川弘文館、2004年)。
 ⑲ 註①に同じ。
 ⑳ 藤堂元甫『三國地誌』(1763年)。
 ㉑ 伊賀の中世城館の歴史的性格については、註③の文献や下記の文献でも触れた。
 a 山田猛『河山郡大山田村 野中城跡』(『昭和56年度県営園地整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1982年)。
 b 山田猛『西出中・近世墓発掘調査報告』(三重県教育委員会、1984年)。
 ㉒ 竹田憲治・伊藤裕輝『名張市中村 浦遺跡』(『伊賀の考古資料 2 研究紀要 第16-4号』三重県埋蔵文化財センター、2007年)。
 ㉓ 門田了三『流川氏城址』(名張市遺跡調査会、1986年)。
 ㉔ 註②aの文献の「下郡地区地形図」でも示してある。
 ㉕ 福永正三『秘蔵の国—伊賀路の歴史地理—』(地人書房、1972年)。
 ㉖ 度会延経『神名帳考証』(1713年)。
 ㉗ 菊岡如幻『伊水温故』(1687年)。
 ㉘ 註⑤に同じ。

〔参考文献〕

- a 伊賀市『上野市史 考古編』(2005年)
 b 市田進一『伊賀の石仏拓本集』(共同精版印刷部、2012年)
 c 宇佐普一・森川櫻男『伊賀における弥生式土器・土師器の集成—型式分類と編年の試案—』(『伊賀郡土史研究』第4輯、伊賀郡土史研究会、1961年)
 d 宇野隆夫『井戸考』(『史林』第65巻5号、1982年)
 e 金山順雄『甲冑小札研究ノート』(榊レーヴック、2006年)
 f 畑中英二『西念寺北遺跡』(滋賀県教育委員会・湖沼遺蹟文化財保護協会、2005年)
 g 平凡社『日本歴史地名体系第24巻 三重県の地名』(1983年)
 h 村松貞次郎『大工道具の歴史』(岩波新書、1973年)
 i 三浦圭一『惣村の起源とその役割』(『史林』第50巻2・3号、1967年)
 j 三重県教育委員会『三重の中世城館』(三重県良書出版会、1977年)
 k 宮島敬一『荘園体制と「地域的一体体制」』(『歴史学研究』1975年度別冊特集、1975年)
 l 森川櫻男『伊賀』(『日本の神々—神社と聖地』第六巻 伊勢・志摩・伊賀・紀伊、白水社、1986年)
 m 湯澤典子『中世後期に地鎮主層の一動向』(『歴史学研究』497、1981年)
 n 山本博『井戸の研究』(文功社、1970年)
 o 吉川金次『鑑』(法政大学出版局、1976年)
 p 渡邊品『大工道具の歴史』(吉川弘文館、2004年)

第1表 第一次調査(試掘)結果一覽表

地区	試掘坑№	遺構	遺物	備考
北区	1~4	無	有	土師器等
	5・6	有	有	土師器等、攪乱
	7	無	有	土師器等、攪乱
観音堂区	8	有	有	土師器等、攪乱
	9	有	有	石組細溝?・土坑・小穴(近世)
	10	有	有	溝・土坑・小穴(中世以降)
	11	有	有	池状遺構(近世)
	12	有	有	柱穴・土坑(近世)
	13	有	有	池状遺構(近世)
	14	有	有	溝(奈良)、土坑・小穴(近世)
	15	有	有	溝(近世)
	16	有	有	石皿、中・近世遺物
	17	有	有	土坑(近世)
山ノ神区	18	無	有	近世陶器等
	19	無	無	
	20	有	有	中・近世遺物
	21	有	有	土坑等
	22	無	有	中・近世遺物
南区	23・24	有	有	石組溝(近世)
	25~27	無	無	
	28	有	無	石組溝(近世以降)
	29	無	有	土師器等
	30	無	有	近世陶器等
	31	有	有	小穴、サヌカイト片等
	32・33	有	有	小穴
	34	有	有	小穴、瓦器等
東区	35	無	無	
	36	無	有	青磁等
	37	無	有	瓦器等
	38	無	無	攪乱
	39	無	有	赤色顔料塗布土師器片等
	40・41	無	有	土師器等
	42・43	無	無	
	44	無	有	須恵器(飛鳥)等、攪乱
	45	無	有	土師器
	46	無	無	
	47	有	有	小穴、土師器
	48	無	無	攪乱
49	無	有	攪乱	
50	無	有	近世陶器等	

第2表 第二次調査(試掘)結果一覽表

地区	試掘坑№	出土遺物
北区	69	土師器・瓦器・陶器
	70	土師器・瓦器・陶器
	71	瓦器・陶器
	72	土師器・瓦器・陶器
	73	
	74	須恵器・土師器・瓦器・陶器
	75	志摩式製塩土器・土師器・陶器
	76	須恵器・土師器・青磁・陶器
	77	土師器・陶器
	観音堂区	60
61		
62		土師器・須恵器・布目瓦・銅銭・砥石
63		
山ノ神区	56	土師器・瓦器・瓦・輪羽口?
	57	土師器
	58	土師器
	59	土師器
南区	53	土師器・瓦器
	54	
東区	55	
	51	瓦器・陶器
	52	土師器・瓦器・陶器
	64	土師器・陶器
	65	土師器・瓦器・陶器
	66	土師器・瓦器・陶器
	67	土師器・瓦器・陶器
	68	土師器・陶器
	78	土師器・陶器
	79	土師器・瓦器・陶器
	80	土師器・瓦器・陶器

第3表 遺構名対照表

〔三次調査北区〕

当報告	既報告	遺物注記
SE303	SE3	SE5
SK322	SK22	SK4
SK323	SK23	SK8
SK324	SK24	SK9
SK325	SK25	SK10
SK326	SK26	SK15
SK327	SK27	SK16
SD311	SD11	SD11
SD312	SD12	SD12
SD313	SD13	SD13
SD314	SD14	SD14
SD315	SD15	SD15
SD316	SD16	SD6
SD317	SD17	SD17
SX306	SX6	SX2
SX307	SX7	SX1

〔三次調査南区〕

当報告	既報告	遺物注記
SB301	SB1	SB1
	SA2	SA2
SE304	SE4	SK34
SK328	SK28	SX50
SK329	SK29	SD32
SK330	SK30	SK41
SK331	SK31	SD35
SK332	SK32	SK36
SK333	SK33	SK52
SK334	SK34	SK32
SK335	SK35	
SK336	SK36	SD33
SD318	SD18	SD31
SD319	SD19	SD33
SD320	SD20	SD30
SD321	SD21	
SX308	SX8	石組池

〔四次調査A区〕

当報告	既報告	遺物注記
SE405	SE5	
SX409	SX9	

〔四次調査B区〕

当報告	既報告	遺物注記
SX410	SX10	石組・東南隅乱石組
SK437	SK37	
SK438	SK38	瓦周部

〔四次調査C区〕

当報告	既報告	遺物注記
SX306		4D 土坑1

〔四次調査D区〕

当報告	既報告	遺物注記
SD420	SD20	大溝
SK451		土坑1

〔五・六次調査〕

当報告	既報告	遺物注記
SE501	SE1	
SE502	SE2	SE2・42
SE603	SE3	井戸3
SE604	SE4	井戸4
SK506		SK6
SD505	SD5	SD43
SD506	SD6	
SD509		溝9
SD510	SD10	SD1
SD511	SD11	SD2
SD515	SD15	
SD516	SD16	
SD518	SD18	SD32
SD620	SD20	
SD521	SD21	SD38
SD522	SD22	SX45
SD630	SD30	大溝、溝13
SD631	SD31	溝9
SD633	SD33	
SX507	SX7	SX40
SX508	SX8	SX50
SX509	SX9	SX48
SX512	SX12	SX44
SX513	SX13	
SX514	SX14	
SX517	SX17	SX22
SX519	SX19	
SX523	SX23	SX23
SX524	SX24	SX25
SX525	SX25	SX26
SX526	SX26	SK17
SX527	SX27	SX16
SX528	SX28	SX33
SX529	SX29	SX18
SX632	SX32	
SX635	SX35	近世土坑

〔七次調査〕

当報告	既報告	遺物注記
SE705	SE5	南B区 塹穴掘方
SE706	SE6	南C区 井戸
SK701	SK1	
SK707	SK7	
SD701	SD1	
SD702	SD2	
SD703	SD3	
SD704	SD4	

第4表 第一・二次調査(試掘)出土遺物一覧表

遺物番号	整理	注記地区・遺構等	備考
101	101-01	TP36	第一次,土師器,甕
102	17	203-01 TP3	第一次,土師器,甕
103	3	203-12 TP27	第一次,土師器,坏
104	42	101-02 TP5	第一次,須恵器,玉珠磨付坏蓋
105	6	101-03 TP31	第一次,須恵器,玉珠磨付坏蓋
106	101-04	TP31	第一次,須恵器,玉珠磨付坏蓋
107	101-05	TP31	第一次,須恵器,玉珠磨付坏蓋
108	4	203-05 TP4	第一次,須恵器,坏
109	7	101-06 TP31	第一次,須恵器,坏
110	41	101-07 TP47	第一次,瓦器,坏
111	18	203-07 TP3	第一次,瓦器,坏
112	4	101-08 TP31	第一次,土師器,甕
113	2	203-10 TP24	第一次,土師器,甕
114	5	101-09 TP31	第一次,須恵器,坏
115	8	101-10 TP31	第一次,須恵器,甕
116	7	203-09 TP20	第二次,土師器,甕
117	6	203-08 TP20	第二次,土師器,甕
118	15	203-03 TP12	第二次,土師器,甕
119	29	102-02 TP37	第一次,土師器,甕
120	5	203-11 TP20	第二次,土師器,甕
121	9	203-01 TP19	第二次,土師器,甕
122	8	203-02 TP19	第一次,土師器,甕
123	39	102-01 TP47	第一次,土師器,甕
124	30	102-03 TP37	第一次,土師器,甕
125	31	102-04 TP37	第一次,土師器,甕
126	43	102-05 TP7	第一次,土師器,甕
127	28	102-06 TP37	第一次,土師器,甕
128	40	102-07 TP47	第一次,瓦器,甕
129	11	203-13 TP20	第二次,土師器,甕
130	16	203-04 TP10	第二次,青磁,甕
131	27	102-08 TP37	第一次,白磁,甕
132	12	201-05 TP10	第二次,信楽焼,磁鉢分埋鉢
133	104-01	TP37	第一次,信楽焼,磁鉢
134	105-02	TP33	第一次,平瓦
135	103-01	TP15	第一次,信楽焼,磁鉢
136	103-02	TP30	第一次,信楽焼,磁鉢
137	10	103-03 TP20	第一次,瀬戸・美濃系,天目茶碗
138	9	103-04 TP29	第一次,瀬戸・美濃系,灰釉甕
139	14	201-01 TP12	第二次,瀬戸・美濃系,香炉
140	13	204-01 TP12	第二次,信楽焼,甕
141	15	104-03 TP31	第一次,染付,甕
142	11	104-05 TP32	第一次,染付,甕
143	12	104-04 TP31	第一次,信楽焼,甕
144	19	104-06 TP31	第一次,信楽焼,甕
145	23	104-02 TP31	第一次,軒瓦
146	105-01	TP16	第一次,石蔵

第5表 第三次調査出土遺物一覧表 (無数の任意数字は注記を参照)

遺物番号	整理	注記地区・遺構等	備考
301	319-05	北区 SD11(SD311)	土師器,甕
302	319-04	北区 SD11(SD311)	土師器,甕
303	319-03	北区 SD11(SD311)	土師器,甕
304	319-02	北区 SD11(SD311)	土師器,甕
305	317-01	北区 5F SK9(SK324)	土師器,甕
306	317-04	北区 5F SK9(SK324)	土師器,甕
307	317-02	北区 5F SK9(SK324)	土師器,甕
308	317-03	北区 5F SK9(SK324)	土師器,甕
309	318-03	北区 SD13(SD313)	土師器,甕
310	306-01	北区 3D 床土	土師器,甕
311	318-02	北区	土師器,甕
312	319-01	北区 SD13(SD313)	信楽焼,磁鉢
313	315-05	北区 SK4(SK322)	瀬戸・美濃系,天目茶碗
314	320-03	北区 SK4(SK322)	瀬戸・美濃系,天目茶碗
315	315-04	北区 SK8(SK325)	青磁,甕
316	309-02	北区 SK1(SK307)	信楽焼,甕
317	317-05	北区 SK4(SK322)	瀬戸・美濃系,灰釉甕
318	311-07	北区 SD17(SD317)	瓦葺,火舎小風炉
319 (16)	303-04	北区 SD13(SD313)	信楽焼,磁鉢
320 (37)	301-02	北区 溝	信楽焼,磁鉢
321	317-06	北区 SD17(SD317)	瀬戸・美濃系,瓶子
322 (21)	301-04	北区 SD17(SD317)	信楽焼,磁鉢
323 (25)	302-07	北区 5H 灰茶土	信楽焼,磁鉢
324 (38)	302-02	北区 4F SK8(SK323)	信楽焼,磁鉢
325	304-01	北区 4E 床土	信楽焼,蓋物
326	315-01	北区 3E 床土	信楽焼,蓋物
327	316-01	北区 SK7(SK328)	土師器,信治
328 (36)	304-03	南区 SX50(SK328)	信楽焼,信治
329	315-03	南区 8C SX50(SK328)	信楽焼,蓋物

330	315-02	南区 8C SX50(SK328)	信楽焼,蓋物
331	320-02	南区 8C SX50(SK328)	信楽焼,蓋物
332	313-01	南区 SX50(SK328)	信楽焼,甕
333	310-01	南区 8C SX50(SK328)	信楽焼,甕
334	307-01	南区 8C SX50(SK328)	信楽焼,甕
335	313-03	南区 8C SX50(SK328)	信楽焼,水指
336	307-05	南区 SX50(SK328)	信楽焼,長皿
337	312-03	南区 SX50(SK328)	染付,甕
338	320-04	北区 SK4(SK322)	瀬戸・美濃系,天目茶碗
339	307-02	南区 SK51	染付,甕
340	309-01	南区 10G P1	土師器,甕
341	307-03	南区 SK45	信楽焼,小皿
342	313-02	南区 19C 石組遺(SX306)	瀬戸・美濃系,灰釉甕
343 (33)	302-04	南区 SK34(SK334)	灰陶,磁鉢
344 (40)	303-01	南区 9D SD3(SD318)底	信楽焼,磁鉢
345	318-01	南区 SD00(SD320)	信楽焼,磁鉢
346	311-03	南区 SD03(SD319)	土師器,甕
347	314-03	南区 灰釉甕(SG1(SD318))	土師器,甕
348	311-01	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	土師器,甕
349	314-04	南区 SD01(SD318) 底	土師器,甕
350	311-02	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	土師器,甕
351	311-02	南区 SD01(SD318) 底	土師器,甕
352	311-05	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	土師器,坏
353	306-04	南区 SD01(SD318) 灰釉土	瀬戸・美濃系,天目茶碗
354	304-02	南区 9D SD1(SD318)	信楽焼,甕
355	308-01	南区 9D SD35(SK331)	染付,甕
356	308-02	南区 9D SD35(SK331)	染付,甕
357	305-01	南区 9D SD35(SK331)	染付,甕
358	312-01	南区 SD01(SD318) 灰釉土	染付,甕
359 (30)	301-05	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	信楽焼,磁鉢
360 (31)	301-06	南区 SD01(SD318)	信楽焼,磁鉢
361 (4)	303-05	南区 SD01(SD318) 灰釉土	信楽焼,磁鉢
362 (5)	303-03	南区 SD01(SD318) 灰釉土	信楽焼,磁鉢
363 (32)	302-01	南区 SD01(SD318) 灰釉土	信楽焼,磁鉢
364 (17)	302-05	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	信楽焼,磁鉢
365 (18)	301-03	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	信楽焼,磁鉢
366 (28)	301-01	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	信楽焼,磁鉢
367 (15)	304-05	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	信楽焼,磁鉢
368 (27)	302-03	南区 SD01(SD318) 9D	信楽焼,磁鉢
369 (22)	321-01	南区 SD00(SD320)	信楽焼,磁鉢
370 (23)	302-02	南区 SD00(SD320)	信楽焼,磁鉢
371 (20)	303-06	南区 SD01(SD318)	信楽焼,磁鉢
372	314-06	南区 SD01(SD318) 灰釉土	丸瓦
373	312-02	南区 SD01(SD318) 灰釉色土	瓦,甕
374	315-06	南区 SD01(SD318) 灰釉土	信楽焼,灯明皿
375	314-02	南区 12G	土師器,甕
376	311-04	南区 12G 灰色土	土師器,灯明皿
377	318-04	南区 13F 灰色土	土師器,甕
378	306-03	南区 10G 灰色土	土師器,甕
379	314-05	南区 8D	土師器,甕
380 (6)	321-02	南区 13F 灰色土	信楽焼,磁鉢
381 (8)	304-04	南区 10E 灰色土	信楽焼,磁鉢
382	311-06	南区 朝床土	土師器,坏
383	309-04	南区 SD84	須恵器,甕
384	318-05	南区 8D	土師器,甕
385	320-01	南区 9D SD35(SK331)	信楽焼,甕
386	310-03	南区 SD03(SD319)	信楽焼,甕
387	307-04	南区 G12	信楽焼,甕
388	309-05	南区 SD03(SD319)	染付,甕
389	308-04	南区 13E 灰色土	信楽焼,甕
390	309-03	南区 14F 灰色砂	瀬戸・美濃系,天目茶碗
391	308-03	南区	染付,甕
392	1	322-01 南区 溝底	木炭型跡
393	3	323-01 南区 溝底	炭前
394	2	322-02	大野型跡
395a	324-03	南区 SD00(SD320) 北土5	不明鉄製品
395b	324-04	南区 SD00(SD320) 北土5	不明鉄製品
395c	324-05	南区 SD00(SD320) 北土5	不明鉄製品
395d	324-06	南区 SD00(SD320) 北土1	不明鉄製品
395e	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395f	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395g	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395h	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395i	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395j	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395k	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395l	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395m	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395n	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395o	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395p	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395q	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395r	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395s	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395t	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395u	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395v	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395w	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395x	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395y	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品
395z	324-11	南区 SD00(SD320) 北土4	不明鉄製品

第6表 第四次調査出土遺物一覧表 (表頭等欄の括弧数字は注目品から)

高取号	遺物名	整理	注記地区・遺構等 (括弧は当欄古遺構名)	備考
401	(1)			信楽焼、磁鉢
402	(3)	401-06	C区 瓦合巻	信楽焼、磁鉢
403	(12)	401-09	B区 南扉土	信楽焼、磁鉢
404	(11)	403-01	D区 大溝(SD420)3C下層2	信楽焼、磁鉢
405	(14)	401-01	表土	信楽焼、磁鉢
406	(7)	403-07	D区 2F床土	信楽焼、磁鉢
407	(34)	401-04	表土	信楽焼、磁鉢
408	(19)	401-08	D区 5C 大溝(SD430)上層	信楽焼、磁鉢
409	(26)	402-05	D区 5B	信楽焼、磁鉢
410	(13)	401-05	B区 (SX410)内	信楽焼、磁鉢
411	(29)	402-04	C区 瓦合巻	信楽焼、磁鉢
412	(2)	401-02	B区 瓦合巻	信楽焼、磁鉢
413	(10)	402-06		信楽焼、磁鉢
414	(35)	401-03	D区 4A	信楽焼、磁鉢
415		406-01	4D+101(SK451)	信楽焼、磁鉢
416	4-(39)	404-01	B区 須磨堂瓦葺(SX410)上層	信楽焼、磁鉢
417	5-(41)	403-02	D区 大溝(SD430)5C下層2	信楽焼、磁鉢
418		407-01		美濃漆、灰桶皿
419		407-04	4C D区 大溝(SD430)下層	青組、鏡
420		407-05	C 瓦合巻	青組、鏡
421		405-03	染付、鏡	
422		405-02	4D+101(SK451)	信楽焼、灰桶皿
423		405-02	C区 瓦合巻	美濃漆、灰桶皿
424	7-(43)	402-02	D区 大溝(SD420)下層2	信楽焼、漆
425	8-(44)	402-01	D 大溝(SD420)下層4(C)	信楽焼、漆
426	8-(45)	402-03	D-6C 大溝(SD420)上層	信楽焼、漆
427		406-02	B地区 瓦間部(SK438)	軒平瓦
428		406-03	D区 6B	軒平瓦
429		404-02		石鏡
430		408-01	D区 大溝 下層2	革半漆塗小札
431		409-01	D区 大溝 下層2	革半漆塗小札

第7表 第五、六次調査出土遺物一覧表 (表頭等欄の括弧数字は注目品から)

高取号	遺物名	整理	注記地区・遺構等 (括弧は当欄古遺構名)	備考
501		508-01	5E 溝(SD360)南側粘土	第六次、磁土、土師、甕
502		505-02	6D-7D 溝(SD631)	第六次、土師、甕
503		510-02	6D 溝(SD631)灰砂質	第六次、土師、甕
504		505-01	6D-7D 溝(SD631)灰砂質	第六次、土師、甕
505		509-02	17E 井戸(SF603)	第六次、信楽焼、磁鉢
506		501-04	SD1(SX540)9+下層No.1	第六次、土師、甕
507		501-03	9C SX2(SX520)下層1	第五次、土師、甕
508		501-01	SX41(SX540)9+下層	第五次、土師、甕、灯明皿
509		501-02	SX41(SX540)9+下層	第五次、土師、甕、灯明皿
510		502-02	SX41(SX540)6+下層No.2	第五次、灰桶、皿
511		504-02	11E SX23(SX523)	第五次、灰桶、皿
512		504-07	11D SX23(SX523)	第五次、灰桶、皿
513		504-06	11C SX23(SX523)礎間	第五次、信楽焼、灯明皿
514		502-01	SK6(SD506)	第五次、灰桶、皿
515		504-03	SX16(SD516)	第五次、志野焼、皿
516		504-01	6C 刷洗色粘質土	第五次、美濃漆、灰桶皿
517		503-06	3E 青組色土	第五次、美濃漆、灰桶皿
518		504-04	6C 刷洗粘質土	第五次、志野焼、皿
519		504-05	SX23(SX523)	第五次、信楽焼、皿
520		503-04	DE 大溝 上層	第五次、青組、鏡
521		503-01	10G SX23(SX523)断面西	第五次、信楽焼、水指
522	(9)	505-03	SX41(SX540)9+下層	第五次、軟陶、磁鉢
523		506-01	G11 SX35(SX635)	第六次、信楽焼、甕
524	(24)	502-05	SE42 青組色土	第五次、信楽焼、磁鉢
525		509-03	17E 井戸(SF603)	第六次、信楽焼、磁鉢
526		510-01	17E 井戸(SF603)	第六次、信楽焼、磁鉢
527		509-01	17E 井戸(SF603)	第六次、信楽焼、磁鉢
528		502-03	SX23(SX523)	第五次、信楽焼、皿
529		503-05	11C SX23(SX523)	第五次、信楽焼、皿
530		503-03	9F P3 No.1	第五次、染付、鏡
531		502-04	9F P3 No.2	第五次、染付、鏡
532		503-02	5D 石埋	第五次、石埋軟陶磁石

第8表 第七次調査出土遺物一覧表

高取号	遺物名	整理	注記地区・遺構等 (括弧は当欄古遺構名)	備考
701	57	702-01	観音堂区(A区)	信楽焼、磁鉢
702	59	703-01	観音堂(A区)	信楽焼、磁鉢
703	47	702-03	観音堂(A区)	瀬戸・美濃漆、灰桶皿
704	14	702-04	観音堂(A区)	土師、甕
705	15	702-05	観音堂(A区)	土師、甕
706	44	710-06	B-1区 DS 城山	瀬戸・美濃漆、火目茶碗
707	5	726-03	B区(B) 6E 大溝(SD701)上層	土師、甕
708	8	725-01	B-1区 F4	須磨堂、坏身
709	10	728-01	B-1区 F4	須磨堂、坏身
710	2	725-08	B区(B) 大溝(SD701)上層	土師、甕、高坏

711	21	715-03	B-1区 B1	土師、甕	
712	13	707-03	B区(B) 6E 城山(須磨堂)	土師、甕	
713	19	703-02	B区(B) 6E 大溝(SD701)上層	土師、甕	
714	20	703-03	B区(B) 大溝(SD701)上層	土師、甕	
715	43	706-03	B区(B) 9E 大溝(SD701)上層	瀬戸・美濃漆、火目茶碗	
716	69	713-03	B-1区 C1	信楽焼、磁鉢	
717		710-05	B-1区 F4	白色磁、漆	
718	70	715-02	B-1区 B1	信楽焼、漆	
719	68	713-02	B-1区 C1	信楽焼、磁鉢	
720	63	707-05	B区(B) G4 大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
721	62	707-04	B区(B) F3 大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
722	58	703-01	B区(B) 大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
723	61	706-02	B区(B) 9E 大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
724	87	704-01	B区(B) 9E 大溝(SD701)上層	瓦貫、甕	
725	28	703-07	B区(南側) 大溝(SD701)上層	土師、甕	
726	88	704-02	B区(B) 9E 大溝(SD701)上層	瓦貫、引釜	
727	85	706-01	B区(B) 9E 大溝(SD701)上層	信楽焼、漆	
728	91	705-01	B区(B) 9E 大溝(SD701)上層	瓦貫、水次	
729	93	710-04	B-1区 F4	信楽焼、香炉	
730	51	707-02	B区(B) G4 大溝(SD701)上層	信楽焼、香炉	
731	4	726-04	観区(B区) S02/S02壁土	土師、甕	
732	6	725-11	観区(B区) S02/S02壁土	土師、甕	
733	7	726-02	南地区(B-2区)	土師、甕	
734	3	725-09	南地区(B-2区)	土師、甕、高坏	
735	1	725-10	南地区(B-2区)	土師、甕、高坏	
736	9	725-07	南地区(B-2区) 奥山土	土師、甕、坏身	
737	9	725-04	観区(B区) 須磨堂(SF603)	須磨堂、坏身	
738	11	725-02	南地区(B-2区)	須磨堂、坏身	
739	12	725-03	B-2区 C1 表土	須磨堂、坏身	
740	17	714-02	B-2区 C1	土師、甕	
741	42	711-03	南地区(B-2区)溝1	青組、鏡	
742	66	717-04	南地区(B-2区)	信楽焼、磁鉢	
743	80	715-01	B-2区 B1	信楽焼、漆	
744	55	714-03	南地区(B-2区)	信楽焼、磁鉢	
745	40	715-05	B-2区 C1	土師、甕	
746	30	714-01	南地区(B-2区)C2 地山土	土師、甕	
747	39	715-04	B-2区 C1	土師、甕	
748	27	711-01	B-2区 B1 溝	土師、甕	
749	86	714-04	南地区(B-2区) 地山土	瓦貫、甕	
750	89	90	712-01	南地区(B-2区)溝1	瓦貫、水次
751	105	714-05	南地区(B-2区)	鏡、引口	
752	106		B区(B) S02/S02壁土	甕、水指	
753	22	721-05	南地区(B-3区)	土師、甕	
754	23	721-06	南地区(B-3区)	土師、甕	
755	24	721-07	南地区(B-3区)	土師、甕	
756	25	724-09	南地区(B-3区)井戸SE606内	土師、甕	
757		724-06	南地区(B-3区)井戸SE606内	土師、甕	
758		724-07	南地区(B-3区)井戸SE606内	土師、甕	
759	26	724-05	南地区(B-3区)井戸SE606内	土師、甕、耳皿	
760		724-04	南地区(B-3区)井戸SE606内	瓦貫、甕	
761	37	723-01	南地区(B-3区)	土師、甕	
762	29	722-03	南地区(B-3区SD701)上層	土師、甕	
763	77	716-04	南地区(B-3区)大溝(SD701)	信楽焼、磁鉢	
764	75	716-05	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
765	76	720-03	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、密か	
766	83	716-06	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、密か	
767	32	723-04	南地区(B-3区)	土師、甕	
768	38	717-02	南地区(B-3区)大溝(SD701)	土師、甕	
769	35	723-02	南地区(B-3区)	土師、甕	
770	36	722-02	南地区(B-3区)	土師、甕	
771	34	722-03	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	土師、甕	
772	33	723-01	南地区(B-3区)	土師、甕	
773	81	717-01	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、漆	
774	71	720-02	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、漆	
775	72	720-01	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
776	73	716-03	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
777	74	718-01	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
778		719-06	南地区(B-3区)	信楽焼、灯明皿	
779	45	717-03	南地区(B-3区)大溝(SD701)	信楽焼、灯明皿	
780		721-04	南地区(B-3区)	信楽焼、甕	
781	50	719-03	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、香炉小茶碗	
782	49	719-02	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、香炉小茶碗	
783		721-03	南地区(B-3区)	信楽焼、甕	
784	48	716-02	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、甕	
785		719-04	南地区(B-3区)南側石垣付	信楽焼、甕	
786		721-01	南地区(B-3区)	信楽焼、甕	
787		721-02	南地区(B-3区)	信楽焼、甕	
788	53	720-04	南地区(B-3区)	瀬戸焼、折縁皿	
789	54	716-01	南地区(B-3区)大溝(SD701)上層	信楽焼、磁鉢	
790		719-01	南地区(B-3区)	信楽焼、甕	
791	104	728-01	南地区(SD450)大溝(SD701)上層	土師、甕、漆	
792	94	708-01	観区(B区)須磨堂(SF603)表土	白土、下口	
793	95	709-01	観区(B区)須磨堂(SF603)表土	石片、下口	

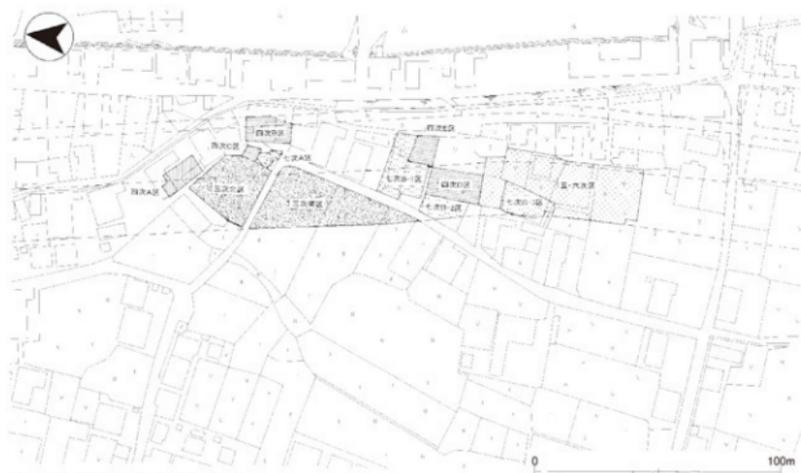


1	下郡遺跡(古代・中世等)	12	住吉神社古墳(円墳)	23	財良寺跡(弥生・古代・中世等)
2	田中遺跡(縄文・平安等)	13	近代古墳(帆立貝式)	24	森脇遺跡(古代)
3	比土遺跡(旧石器・弥生等)	14	王塚古墳(前方後円墳)	25	唐木谷遺跡(古代)
4	奥城寺遺跡(縄文等)	15	猪田神社古墳群(円墳)	26	彼岸台遺跡(古代)
5	源島遺跡(縄文)	16	天童山古墳群(円墳)	27	三石代遺跡(古代)
6	久米山古墳群(支群)1号墳(弥生・古墳)	17	南山ノ奥6号墳(円墳)	28	上寺遺跡(古代・中世等)
7	山ノ川遺跡(弥生・古代)	18	城之越遺跡(古墳～古代)	29	猪田経塚(中世)
8	北長野遺跡(弥生)	19	二ツ崎古窯跡(古墳)	30	長隆寺
9	岩ヶ上遺跡(弥生)	20	北堀池遺跡(古墳・中世等)	31	安田中世墓(中世)
10	森寺遺跡(弥生)	21	高賀遺跡(古墳～中世)	32	下り合遺跡(中世)
11	石山古墳(前方後円墳)	22	馬場西遺跡(古墳～古代)	33	丸山城跡(中世)

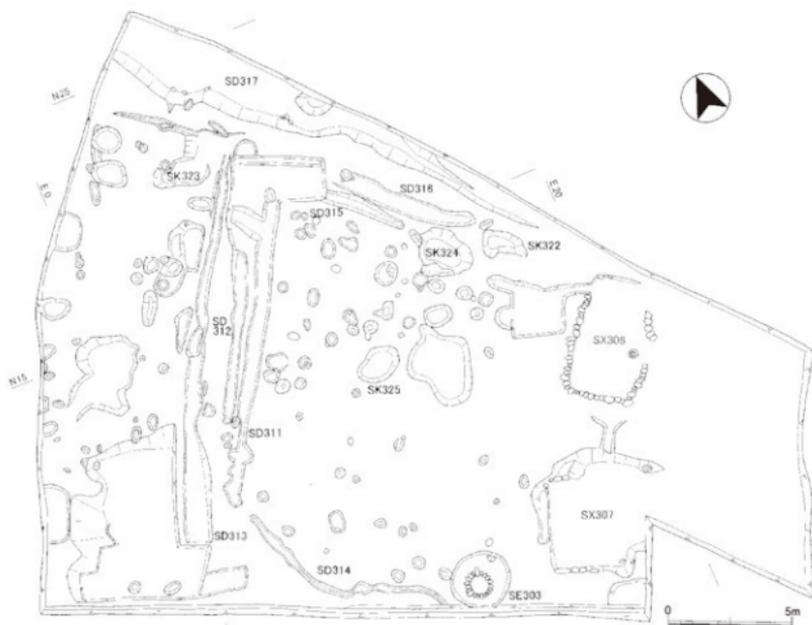
第1図 位置図(1/50,000 国土地理院1/25,000 H17伊勢路・H12月ヶ瀬から) □は上掲以外の中世城館



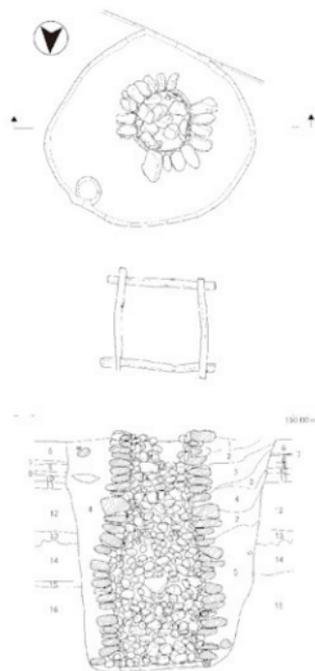
第2図 地形図(1/5,000) 県調査□ 本調査■ 一次● 二次、市・調査会□ 本調査 ▲ 試掘、()は古地名



第3図 発掘調査区割図(1/2000)



第4図 第三次調査北区・第四次C区平面図(1/200)

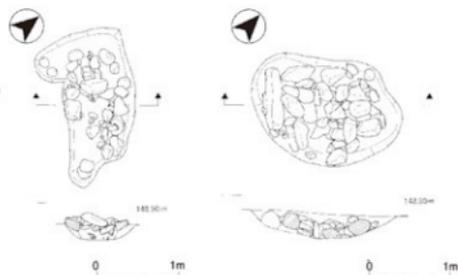


- | | |
|----------------|---------------|
| 1 茶黄色粘土 | 9 斑痕人灰色粘土 |
| 2 灰色砂礓 | 10 明黄色粘土 |
| 3 淡黄色粘土 | 11 黑黄色粘土 |
| 4 暗茶黄色粘土 | 12 暗灰色粘土 |
| 5 暗青灰色粘土 | 13 灰色粘土 |
| 6 茶色粘土 | 14 植筋瓦泥人黑黄色粘土 |
| 7 黄色粘土埋泥人暗灰色粘土 | 15 带灰色砂 |
| 8 暗茶青色粘土 | 16 灰色砂礓 |

第5图 第三次调查北区SE303实测图(1/60)

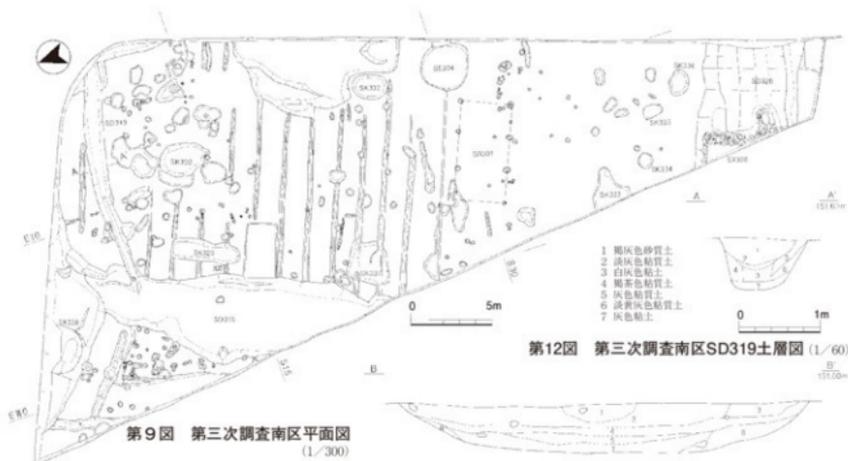


第6图 第三次调查北区SX306实测图(1/60)



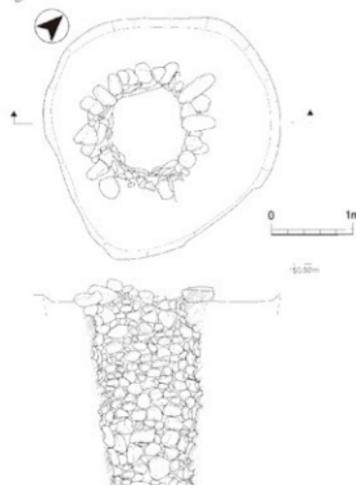
第7图 第三次调查北区SK322实测图(1/60)

第8图 第三次调查北区SK325实测图(1/60)



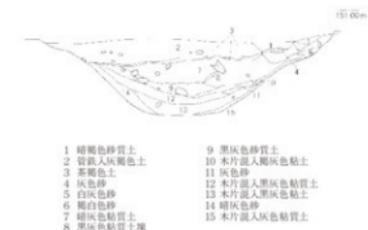
第12図 第三次調査南区SD319土層図 (1/60)

第9図 第三次調査南区平面図 (1/300)

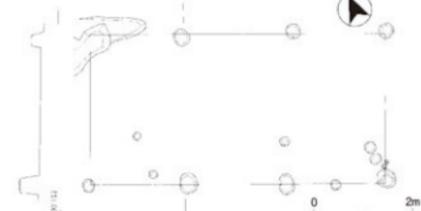


第10図 第三次調査南区SE304実測図 (1/60)

第13図 第三次調査南区SD318土層図 (1/60)

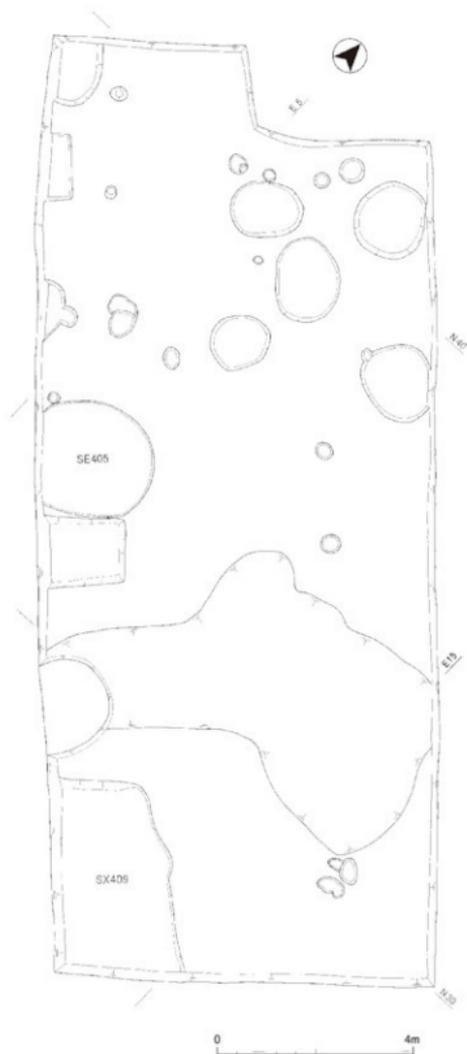


第14図 第三次調査南区SD320実測図 (1/100)

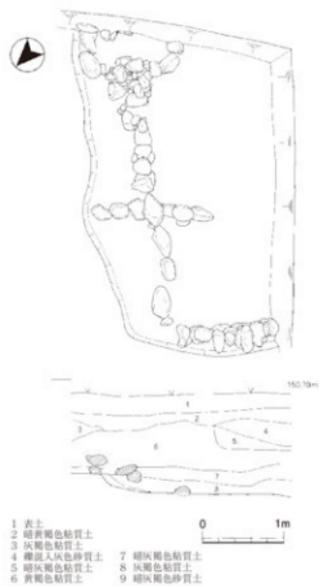


第11図 第三次調査南区SB301平面図 (1/100)

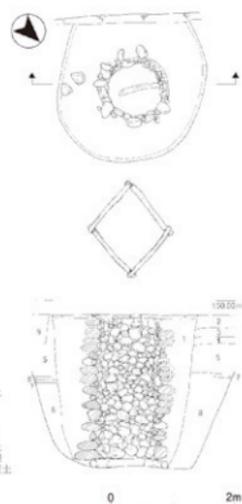
- 1 暗褐色砂質土
2 管状人灰褐色土
3 茶褐色土
4 灰色砂
5 白灰色砂
6 暗白色砂
7 暗灰色粘質土
8 深灰色粘質土
9 黑灰色砂質土
10 木片混入褐色粘土
11 灰色砂
12 茶褐色土
13 木片混入深灰色粘土
14 暗灰色砂
15 木片混入灰色粘質土



第15图 第四次调查A区平面图 (1/100)



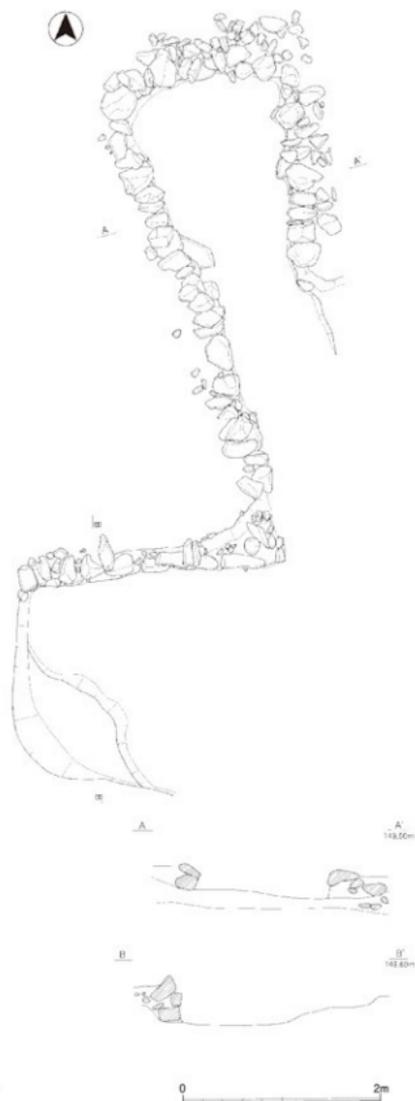
第16图 第四次调查A区SX409实测图 (1/60)



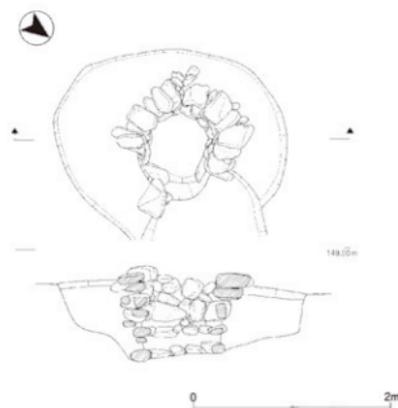
第17图 第四次调查A区SE405实测图 (1/80)



第18图 第四次调查B区平面图 (1/200)



第20图 第四次调查B区SX410实测图 (1/50)

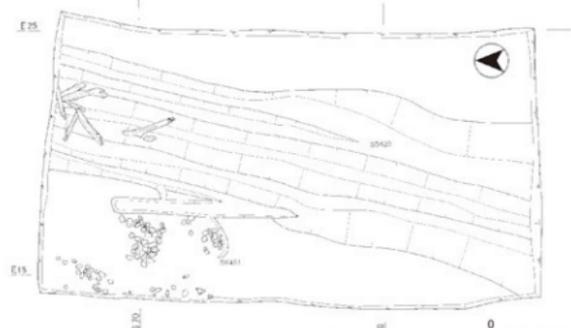


第19图 第四次调查B区SK437实测图 (1/50)

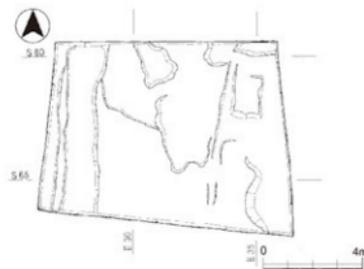


第21图 第四次調査D区北壁土層図 (1/80)

- 1 暗褐色砂質土(砂土)
- 2 明褐色砂質土
- 3 灰黄色砂質土
- 4 灰赤砂質土
- 5 明褐色砂質土
- 6 暗赤褐色砂質土
- 7 暗赤褐色砂質土
- 8 黑褐色砂質土
- 9 赤褐色砂質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 雜混入暗褐色粘質土
- 12 黄色粘質土
- 13 赤灰色粘質土
- 14 褐色粘質土
- 15 暗黄褐色粘質土
- 16 灰褐色粘質土
- 17 灰黄色粘質土
- 18 赤灰色粘質土
- 19 灰黄色粘質土
- 20 褐色粘質土
- 21 赤褐色粘質土
- 22 赤灰色粘質土
- 23 暗赤褐色粘質土
- 24 暗赤灰色粘質土
- 25 褐色砂質土混入黑褐色粘質土
- 26 砂雜混入暗赤灰色粘質土
- 27 緑灰色粘質土
- 28 雜混入暗赤灰色砂質土
- 29 灰褐色粘質土
- 30 灰色砂質土
- 31 有機物混入黑褐色粘質土
- 32 灰色砂質土



第22图 第四次調査D区平面図 (1/200)



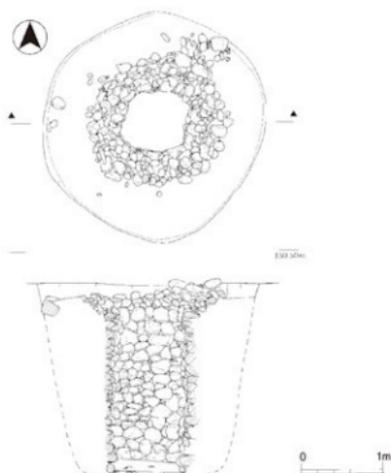
第23图 第四次調査E区平面図 (1/200)



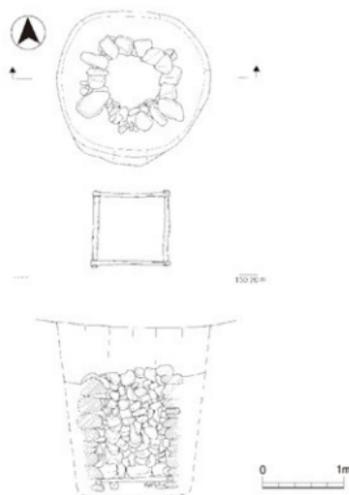
第24图 第五次調査区平面図 (1/400)



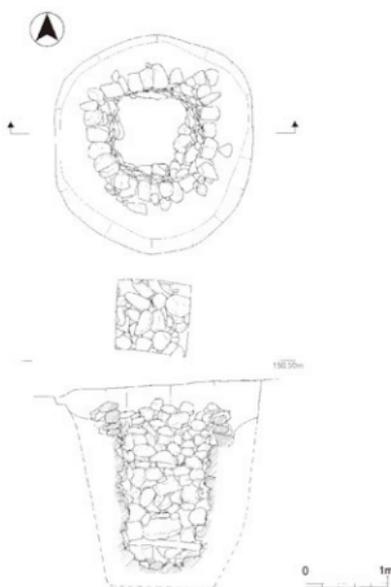
第25图 第六次調査区平面図 (1/400)



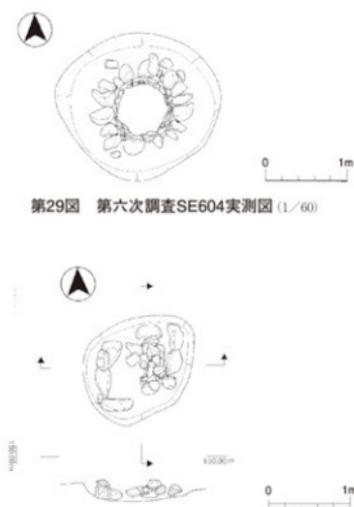
第26図 第五次調査SE501実測図 (1/60)



第28図 第六次調査SE603実測図 (1/60)



第27図 第五次調査SE502実測図 (1/60)



第30図 第六次調査SX635実測図 (1/60)



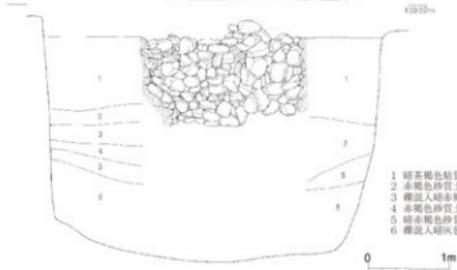
第31图 第七次调查A区平面图 (1/300)



第32图 第七次调查B-2区平面图 (1/200)



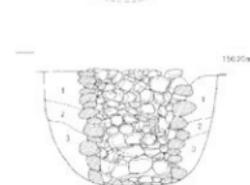
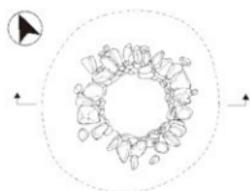
第34图 第七次调查B-3区平面图 (1/200)



第33图 第七次调查B-2区SE705实测图 (1/60)

- 1 碎茶褐色粘质土
- 2 赤褐色砂质土
- 3 硬泥人相赤褐色砂质土
- 4 赤褐色砂质土
- 5 硬赤褐色砂质土
- 6 硬泥人相灰色砂质土

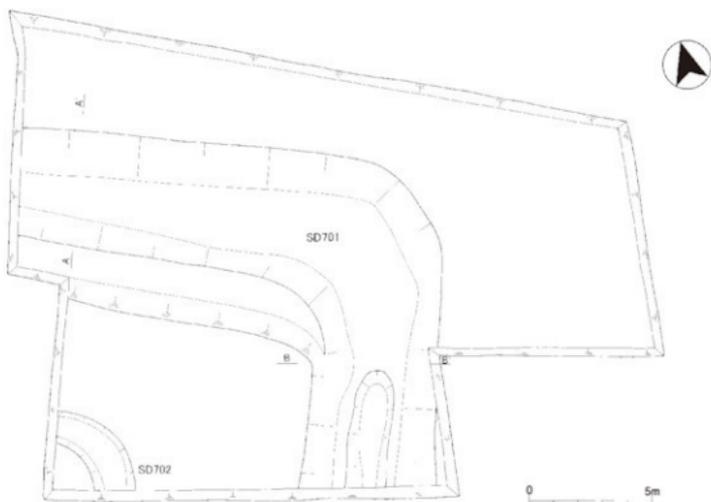
0 1m



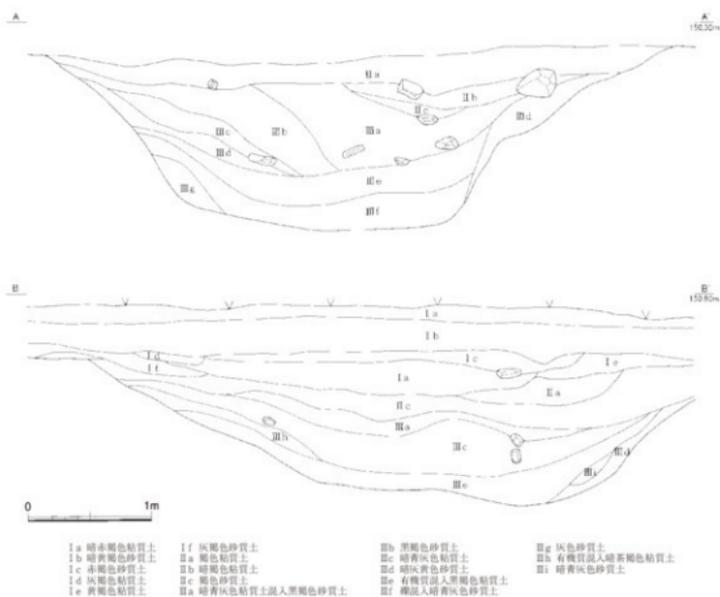
0 1m

第35图 第七次调查B-3区SE706实测图 (1/60)

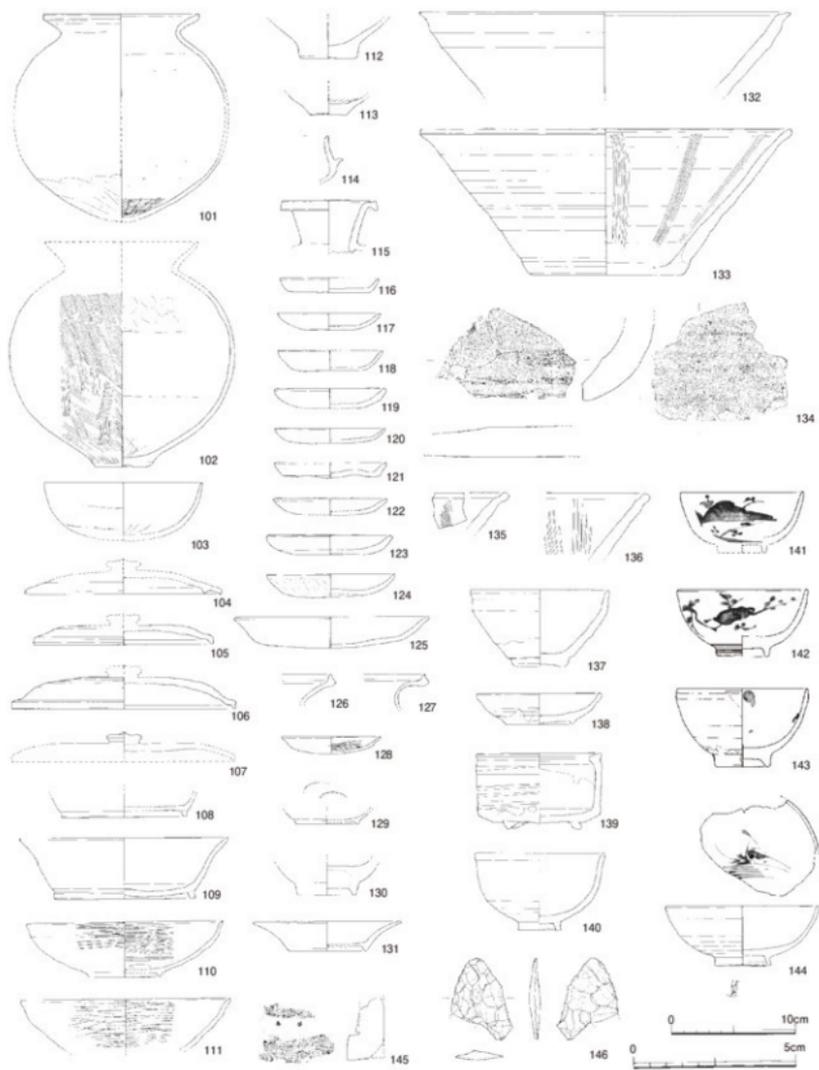
- 1 赤褐色粘质土
- 2 赤褐色砂质土
- 3 黄灰色砂质土



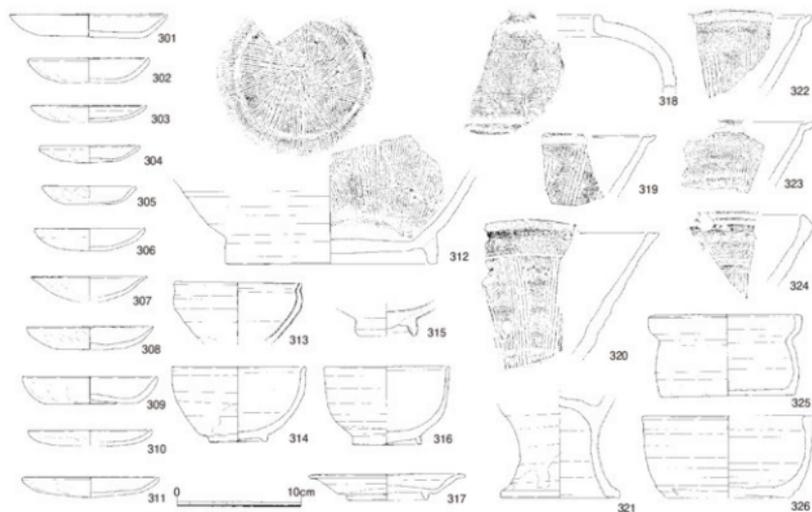
第36图 第七次調査B-1区平面图 (1/200)



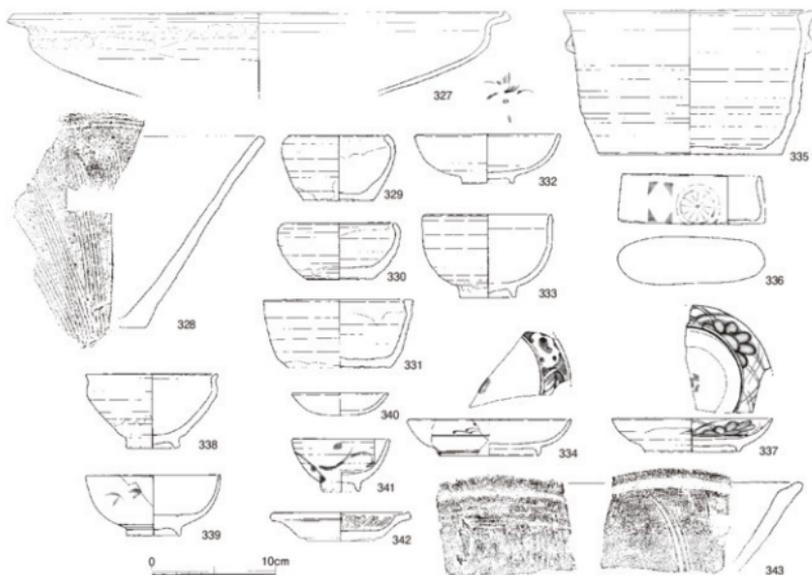
第37图 第七次調査B-1区SD701土層図 (1/40)



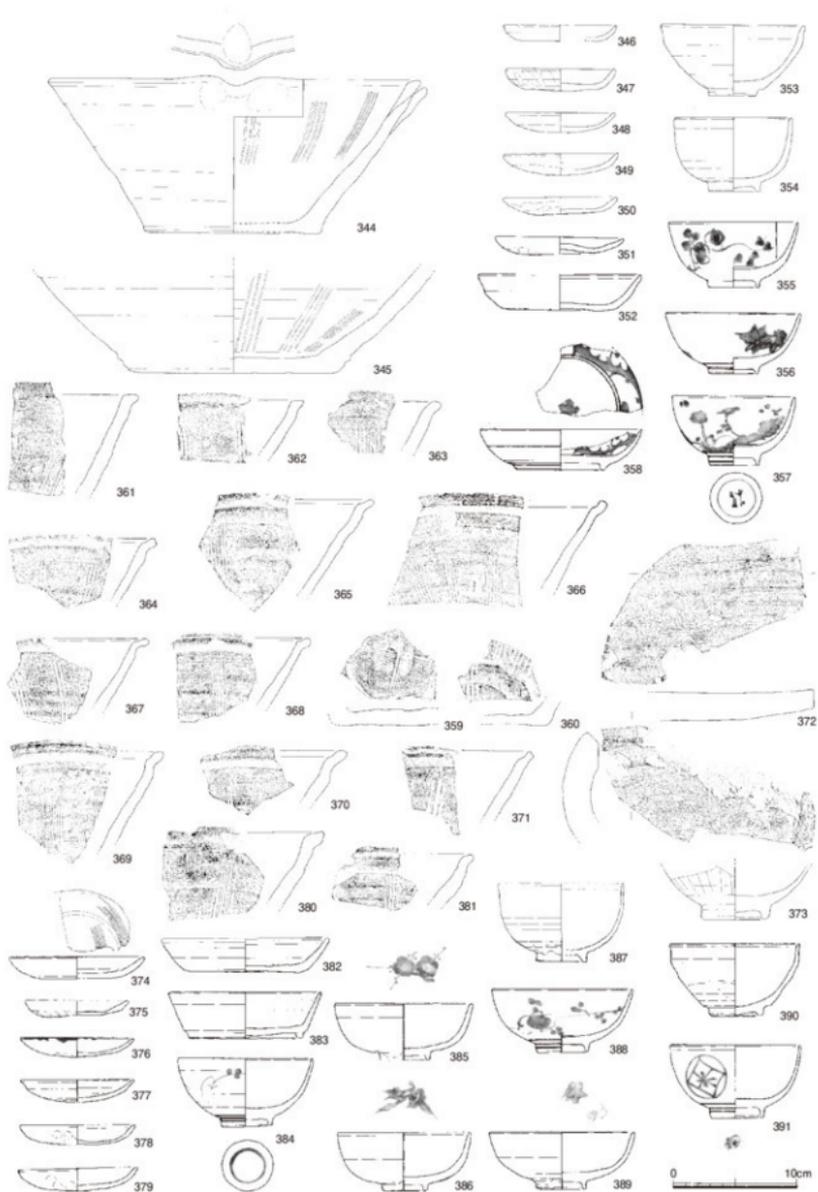
第38图 第一·二次调查区出土文物实测图 (146122/3, 地121/4)



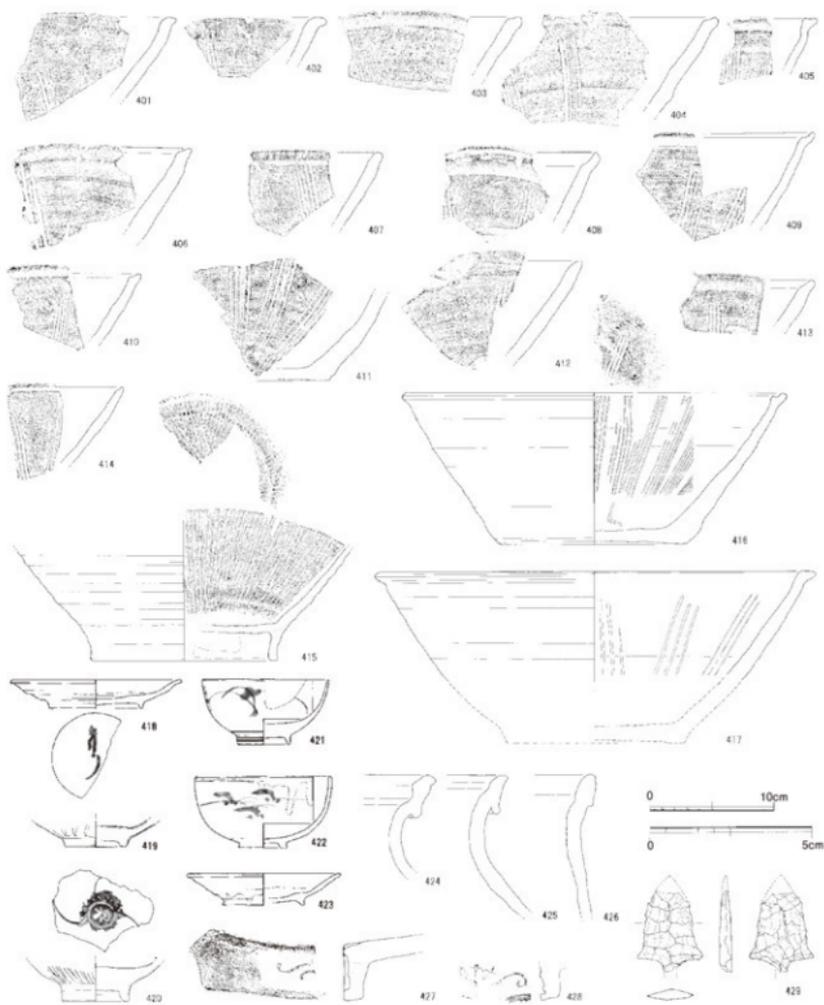
第39图 第三次调查北区出土物实测图(1/4)



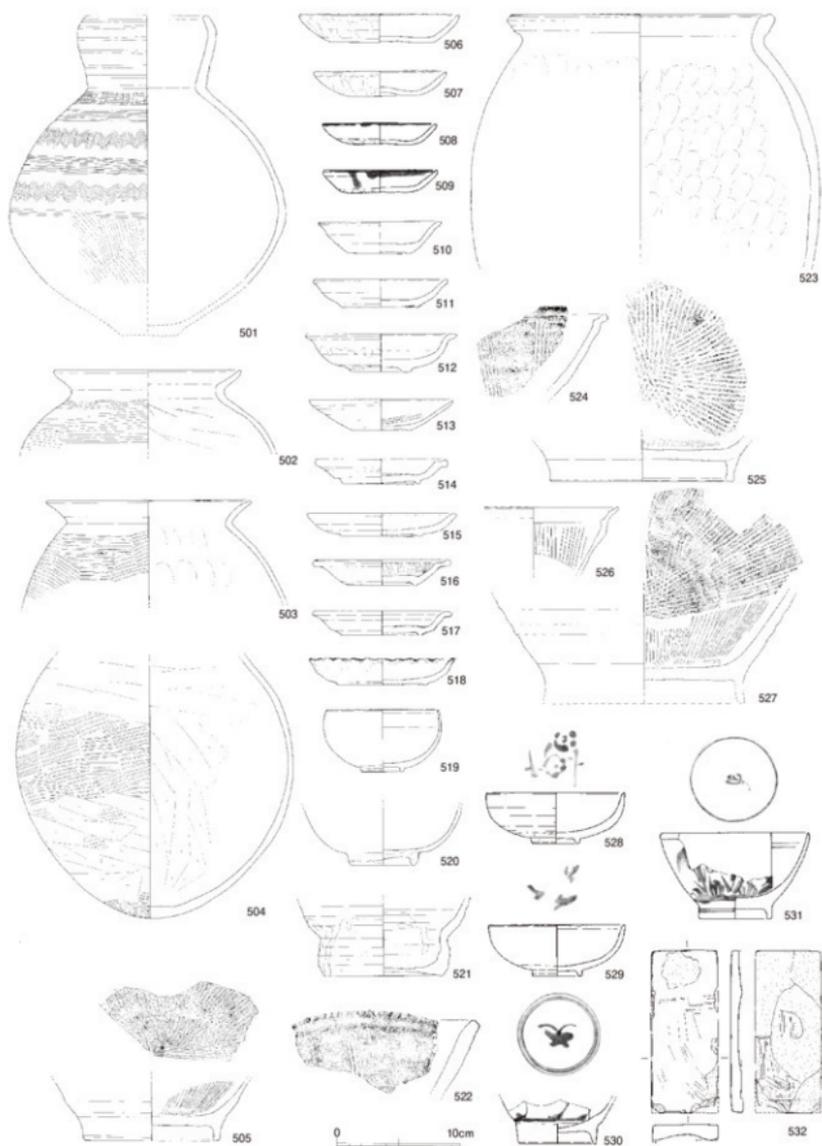
第40图 第三次调查南区出土物实测图(1) (1/4)



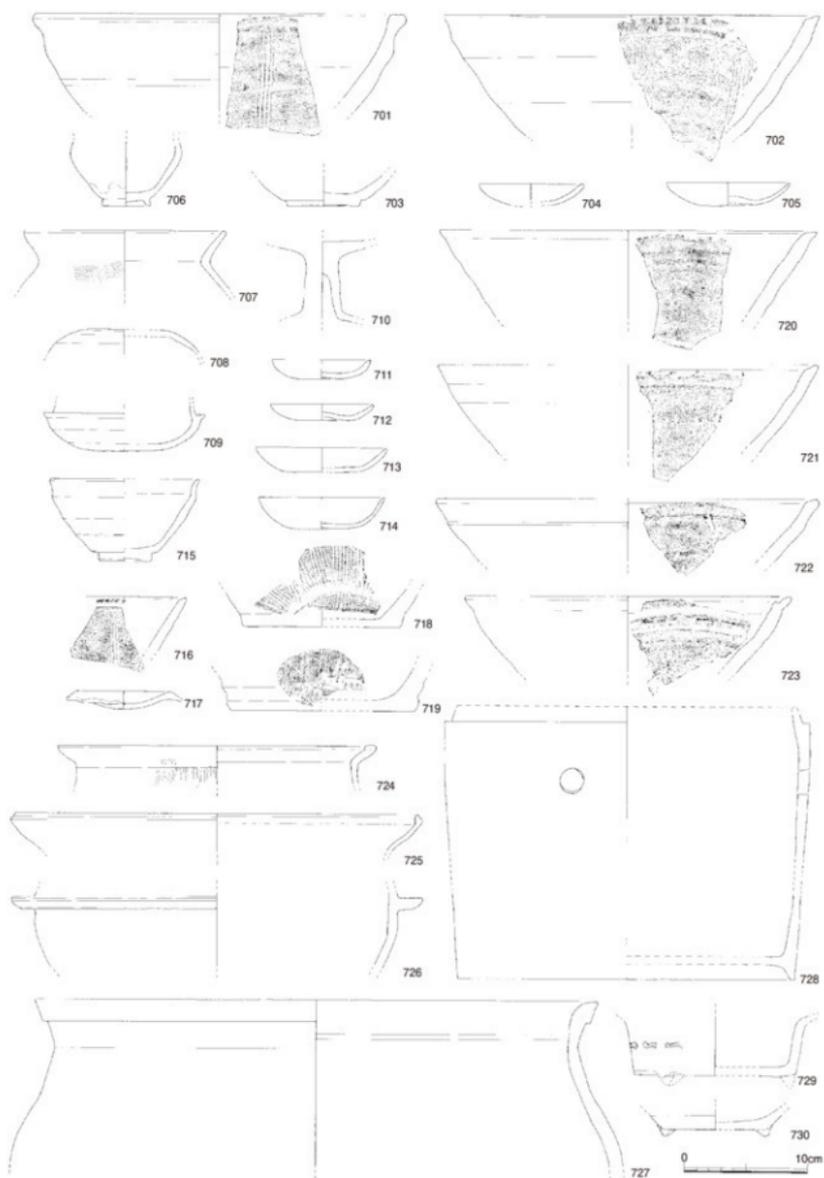
第41图 第三次调查南区出土物实测图(2) (1/4)



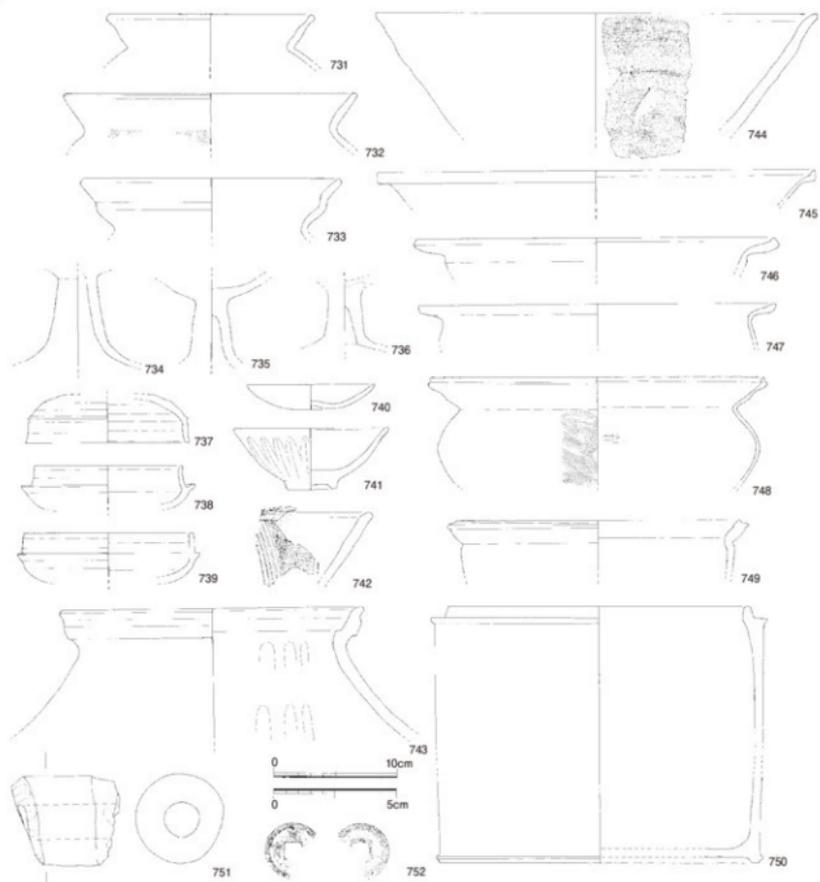
第42图 第四次调查区出土遗物实测图(20142/3, 图141/4)



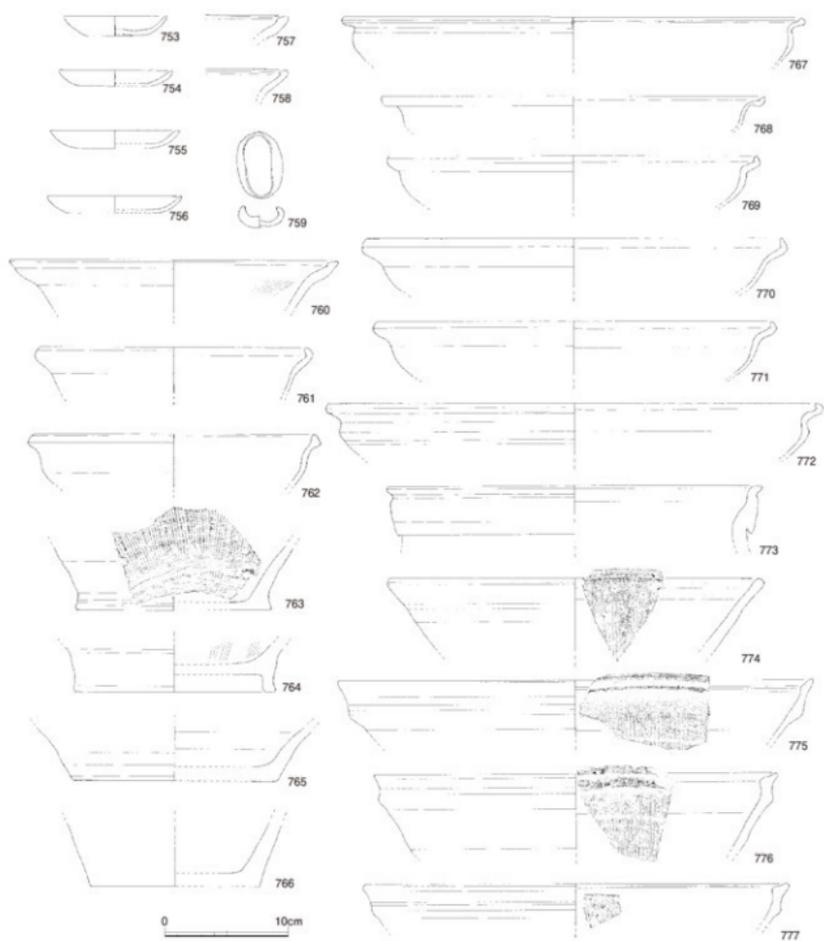
第43图 第五·六次调查区出土物实测图 (1/4)



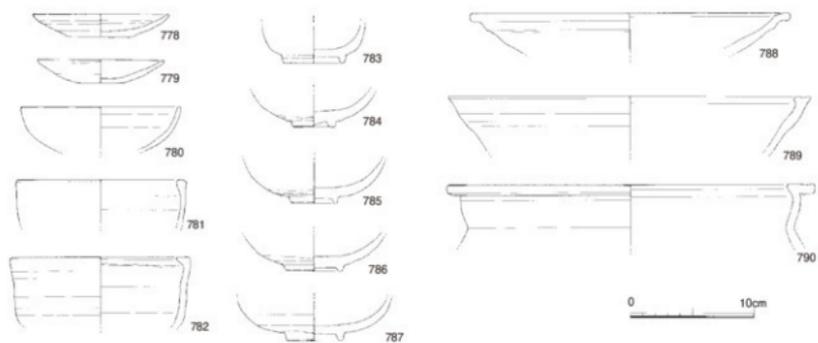
第44図 第七次調査A・B-1区出土遺物実測図(1/4)



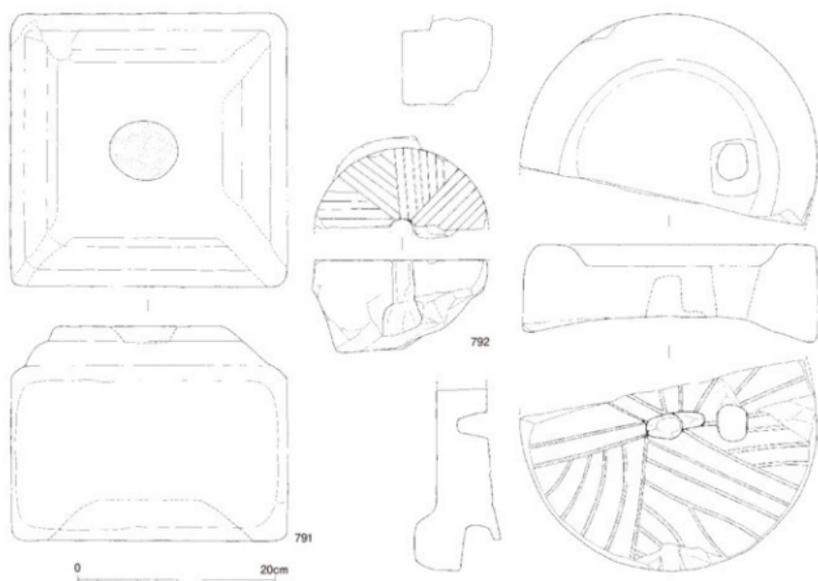
第45图 第七次調査B-2区出土遺物実測図 (752(41/2)、他(41/4))



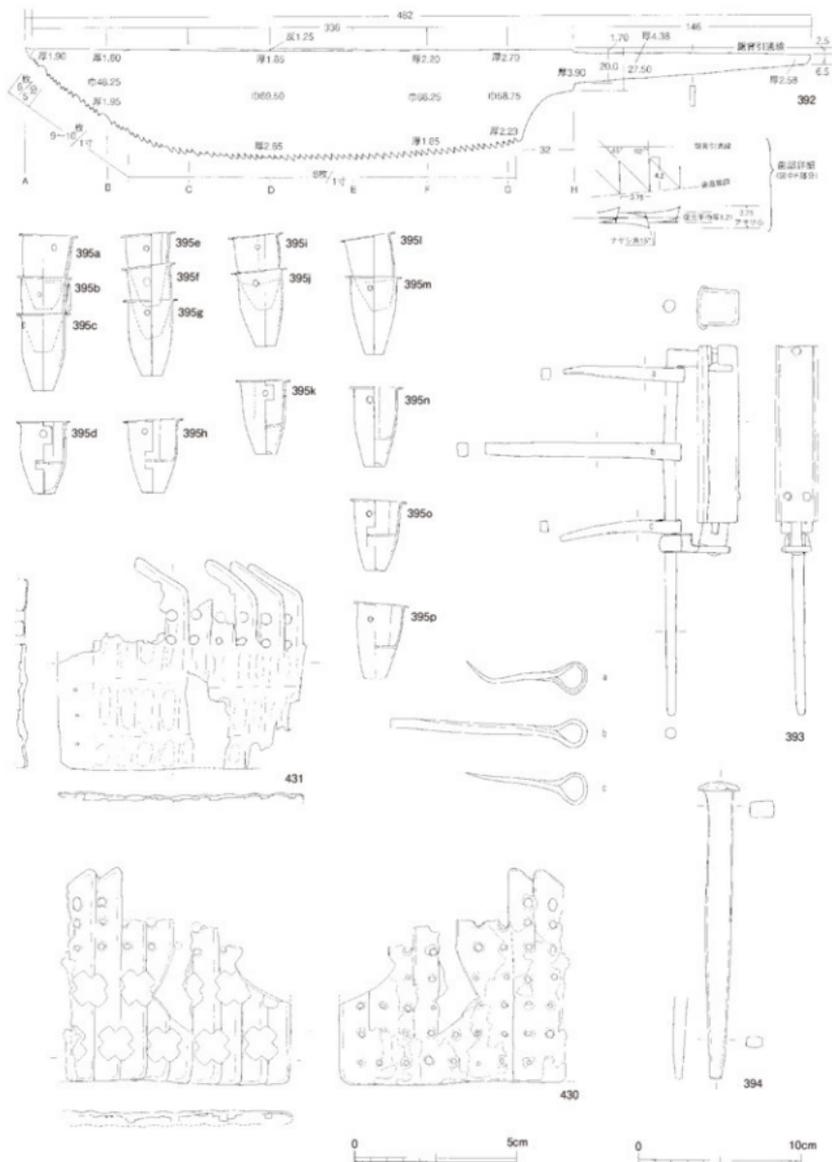
第46図 第七次調査B-3区出土物実測図(1) (1/4)



第47図 第七次調査B-3区出土遺物実測図(2) (1/4)



第48図 第七次調査B-1・2区出土石造遺物実測図 (1/5)



第49図 第三次調査南区SD320出土鉄製品、第四次調査SD420出土小札実測図
木製壺類(392)・鏡前(393)・大型角釘(394)・不明鉄製品(395)・半芯鎌型小札(430・431) (430・431は2/3、他は1/3)



下都地区空中写真 (SW→)



旧観音堂板碑(10) (NNE→)



巡拝供養碑・大師橋供養碑 (WSW→)



第三次調査北区 (NW→)

写真図版2



SD316・315等 (NW→)



SX306・307 (NNE→)



第三次調査北区南東部 (NNW→)



SX307 (SSW→)



SX306 (NW→)



SX306 (SE→)



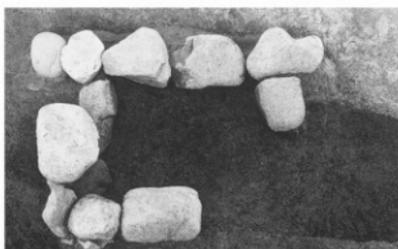
SX306 (NW→)



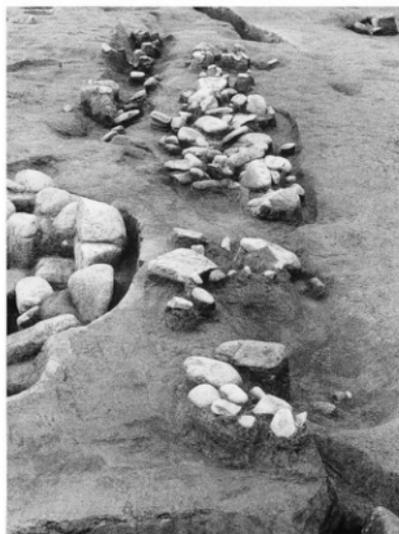
SX306 (NE→)



SX306 (SW→)



SK322 (SW→)

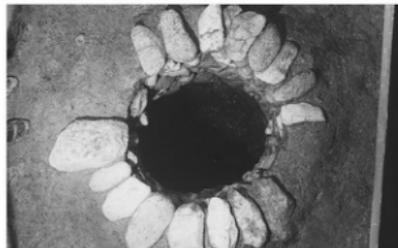


SD316等 (SW→)



SD311~313 (SSW→)

写真図版 4



SE303



SK323 (SW→)



SE303 (NNE→)



SK325 (NW→)



SE303 (NNE→)



第三次調査南区北部 (WNW→)



SE303 (NNE→)



第三次調査南区 (SSW→)



SD318 (SSW→)



SD320 (SSW→)



SD320-SX308 (ESE→)



SD320 (WNW→)



木葉型鏢(392)出土状況



錠前(393)・不明鉄製品(395a~p)出土状況

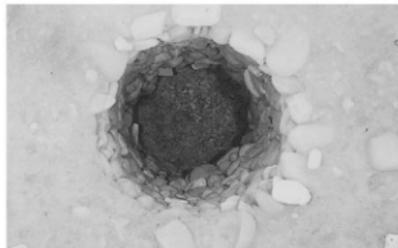


大型角釘(394)出土状況

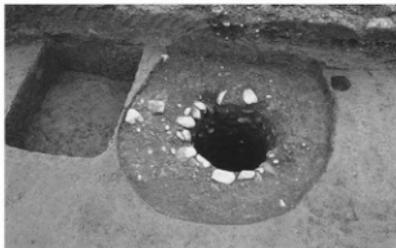


SE304 (ESE→)

写真図版6



SE405



SE405 (NE→)



SE405 (NE→)



SX409 (NE→)



SE405 (NE→)



第四次調査B区 (N→)



SE405 (NE→)



SX410 (SSE→)



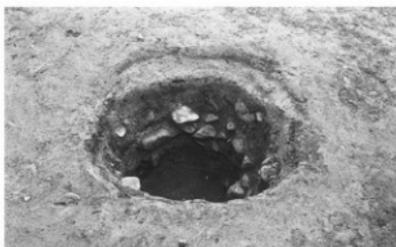
SX410 (S→)



SX410 (SSE→)



SK437 (NE→)



SK438 (E→)



SK438 (W→)



SK438 (N→)



第四次調査D区 (SSW→)



第四次調査D区 (NNE→)

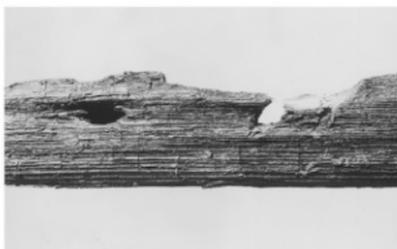
写真図版 8



SD420 (SE→)



SD420出土鉄劔



SD420出土木製品



第六次調査区 (S→)



第五次調査区北部 (W→)



SX507等 (E→)



SX514、SD511・515等 (ESE→)



SD516、SE501、SX513・512 (E→)



SX512 (WNW→)



SX507 (E→)



SX528 (S→)



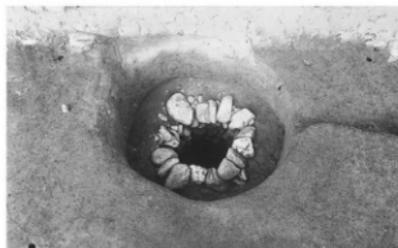
SX519 (S→)



SE501 (W→)



SE502 (WSW→)



SE603 (S→)

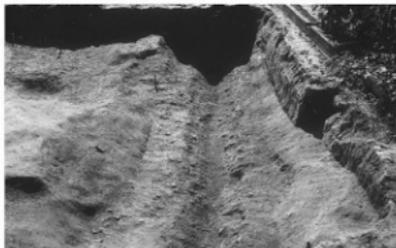


SE604 (N→)

写真図版10



SX635 (N→)



SD620 (NNE→)



SD630 (W→)



SD630 (E→)



第七次調査B-1区 (WNW→)



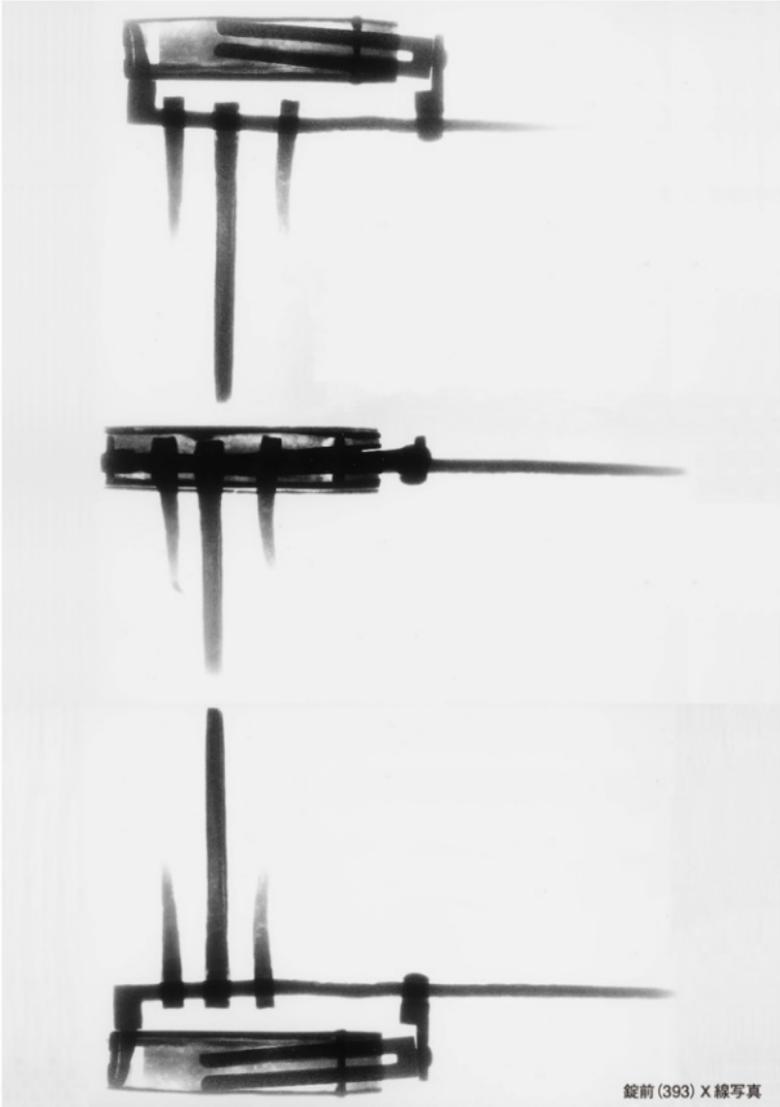
第七次調査B-1区 (N→)



SE706 (ESE→)



SE706 (SSW→)



錠前 (393) X線写真

写真図版12



不明鉄製品(395a~p)



501



343内外面



101



137



139



142



325



335



336



341



344



355



356



357

写真図版14



366



381



382



383



388



391



401



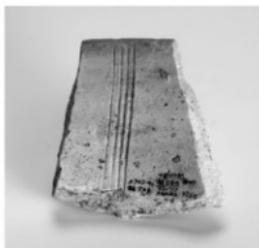
408



416



422



701



751

報告書抄録

ふりがな	しもごおりいせき — だいいちからななじょうさ —																																																				
書名	下郡遺跡 — 第一～七次調査 —																																																				
副書名																																																					
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告																																																				
シリーズ番号	335																																																				
編著者名	山田 猛																																																				
編集機関	三重県埋蔵文化財センター																																																				
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732																																																				
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月1日																																																				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因																																													
しもごおりいせき 下郡遺跡	みえびよんがしよごおり 三重県伊賀市下郡	24216	3143	34° 42' 37"	136° 8' 45"	1978.10.16 ～ 1985.10.17	7,380	木津川改修事業																																													
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項																																																
下郡遺跡	集落遺跡 中世居館跡	中・近世	中世居館跡 石組井戸	中世の木葉型鋸 や錠前等	中世居館跡から木葉型鋸や錠前・ 小札・鉄鏝・建築部材(?)等が出土																																																
要 約	<p>〔関係報告書類〕</p> <p>当報告書は、三重県教育委員会が実施した下記の発掘調査の報告等をまとめたものである。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%;">第一次調査</td> <td style="width: 20%;">昭和53(1978)年度</td> <td style="width: 20%;">試掘調査</td> <td style="width: 20%;">「一次概報」</td> <td style="width: 20%;">1979年刊行</td> </tr> <tr> <td>第二次調査</td> <td>昭和54(1979)年度</td> <td>試掘調査</td> <td>「二次概報」</td> <td>1980年刊行</td> </tr> <tr> <td>第三次調査</td> <td>昭和55(1980)年度</td> <td>本調査</td> <td>「三・四次概報」</td> <td>1982年刊行</td> </tr> <tr> <td>第四次調査</td> <td>昭和56(1981)年度</td> <td>本調査</td> <td>「三・四次概報」</td> <td>1982年刊行</td> </tr> <tr> <td>第五次調査</td> <td>昭和57(1982)年度</td> <td>本調査</td> <td>「57・58年度概報」</td> <td>1984年刊行</td> </tr> <tr> <td>第六次調査</td> <td>昭和58(1983)年度</td> <td>本調査</td> <td>「57・58年度概報」</td> <td>1984年刊行</td> </tr> <tr> <td>第七次調査</td> <td>昭和60(1985)年度</td> <td>本調査</td> <td>「七次報告」</td> <td>1986年刊行</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>嘉米國夫「中世の大工用鋸(木の葉型鋸)」(『全建ジャーナル』2)</td> <td>1986年刊行</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>山田猛「下郡遺跡群出土の鐮鉢」(『Miehistory』vol.1)</td> <td>1990年刊行</td> </tr> </table>								第一次調査	昭和53(1978)年度	試掘調査	「一次概報」	1979年刊行	第二次調査	昭和54(1979)年度	試掘調査	「二次概報」	1980年刊行	第三次調査	昭和55(1980)年度	本調査	「三・四次概報」	1982年刊行	第四次調査	昭和56(1981)年度	本調査	「三・四次概報」	1982年刊行	第五次調査	昭和57(1982)年度	本調査	「57・58年度概報」	1984年刊行	第六次調査	昭和58(1983)年度	本調査	「57・58年度概報」	1984年刊行	第七次調査	昭和60(1985)年度	本調査	「七次報告」	1986年刊行				嘉米國夫「中世の大工用鋸(木の葉型鋸)」(『全建ジャーナル』2)	1986年刊行				山田猛「下郡遺跡群出土の鐮鉢」(『Miehistory』vol.1)	1990年刊行
第一次調査	昭和53(1978)年度	試掘調査	「一次概報」	1979年刊行																																																	
第二次調査	昭和54(1979)年度	試掘調査	「二次概報」	1980年刊行																																																	
第三次調査	昭和55(1980)年度	本調査	「三・四次概報」	1982年刊行																																																	
第四次調査	昭和56(1981)年度	本調査	「三・四次概報」	1982年刊行																																																	
第五次調査	昭和57(1982)年度	本調査	「57・58年度概報」	1984年刊行																																																	
第六次調査	昭和58(1983)年度	本調査	「57・58年度概報」	1984年刊行																																																	
第七次調査	昭和60(1985)年度	本調査	「七次報告」	1986年刊行																																																	
			嘉米國夫「中世の大工用鋸(木の葉型鋸)」(『全建ジャーナル』2)	1986年刊行																																																	
			山田猛「下郡遺跡群出土の鐮鉢」(『Miehistory』vol.1)	1990年刊行																																																	

三重県埋蔵文化財調査報告335

下郡遺跡 — 第一～七次調査 —

発行年月 2013(平成25)年3月1日
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 文化印刷株式会社

